
魔法少女リリカルなのはViVid Another Story

インド人を右に

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid Another Story

【Nコード】

N1710X

【作者名】

インド人を右に

【あらすじ】

初等科最終実技試験の成績は学院内ワースト。

St・ヒルデ魔法学院中等科1年生の市ノ瀬 涼は、魔法の才能皆無な所謂落ちこぼれ。

「落ちこぼれにも意地がある」と日々練習に明け暮れる彼が、出会ったのは―― 転生でもない普通のオリ主もので、基本的に原作通りに進む予定。主人公最強とかではないのでその手の作風が好きな人は回避した方がよろしいかと。気軽に感想下さると嬉しいです。

第1話

次元の海を中心世界“ミッドチルダ”

ジェイル・スカリエッティが首謀となって起こした都市型テロ“J
S事件”から4年経過したそんな年。

そして俺——市ノ瀬涼の人生を左右した、あの事件からも丁度4年
目の年。

ザ・ヴィヴァッド
鮮烈な物語の始まりなんて、全く予想もしていなかった。

始まりの季節——世の中的には入社式や入学式であったりするわけ
で。

心機一転、生活態度を戒めるのにも都合が良い季節でもある。
そう思いつつも、あくまでいつも通りに背を丸めたまま道の端を歩
く。

ちなみに視線は下向き。アスファルトとお見合い状態である。
改善すべきはこういう所なのだろうけれど——

「あ……あれって——」

「よく平然とやって来られるなあ」

「ある意味大物だな。ハハ」

とまあ、こんな中傷的な視線と言葉のお陰で改善出来ず、1年ほど経過してしまっているのが現状である。

だが、全てが彼等のせいと言うわけでもない。

向上心が欠けている性分だから、もう色々諦めて生きて来た人生なのだから。

「はあー」

溜息を吐いて、歩みを速める。

俺は学院が嫌いだ。

St・ヒルデ魔法学院——それが俺の通う、所謂“魔法使いのための”学校である。

まわりは当然将来の魔導師さんたちで溢れ返っている。

取り分けて本学院は学院生たちの偏差値が高めであるため、殆ど魔法の使えない人間が紛れ込んでいれば、その場違いな存在に浮いてしまうことは必至。

その“魔法が殆ど使えない人間”というのが、俺——市ノ瀬 涼である。

元々魔法文化圏外出身のため、使えること自体が奇跡だったようで、その奇跡で全ての運を使いきってしまった感が否めない。

魔力の総量はFランクにも満たないという現実を付きつけられれば、そんな風に思えてしまう。

魔力総量は俺くらいの年だとまだ伸びる望みはあるのだが、数年前から増えている様子は皆無。

成長期を超えれば、滅多なことがない限り増えたりなんかしない。ある程度魔力に余裕があるのなら、努力でいくらでもカバーしきれるだろうが……俺の場合出来ることなんて限られている。

魔力使用効率向上による魔力節約。

魔法高速運用。

この程度のものだ。

魔力使用効率は術式の簡略化や、不用な魔法効果を取り除くことでその分魔力を節約するなどだ。

同じ魔力を使うにしても出来るだけ見返りの多い方が良い。

他の連中からすれば本当に些細なモノかもしれないが、俺に取っちゃそれすらも“勿体無い”と感じる。

必ずしも魔力量で魔導師ランクが決まるわけではない、という点が唯一の救いだろうな。

就職先が管理局以外って言うのであれば、今悩んでいる全ての事柄は気にせずに済む。

それでも、どうしても諦められない理由は一体何なのだろうか？

実に単純で不純な動機。

憧れなんてのは、ほんの三割程しかないのだから……

大半を、過去へのケジメのためだけに費やしている——他人の前では綺麗事ばかりを並べた動機を語っている。

それを告げる度——嘘を吐く度に、心のどこかが痛む。

動機を知る知人は「復讐なんて下らない」なんて言葉を口にしたが、その意見には俺自身も同意するしかない。

馬鹿らしいって事は分かっているけどな……

でもまあ、今のままじゃ局の魔導師にすらならない。

魔法を使える者を魔導師として定義するのであれば、現時点で達成しているのだが、“局の”と頭に付く事で随分と難易度が上昇してしまう。

「はあ……」

漏れた溜息は本日何度目だろうか。

それと同時に湧き上がるのは、自身の不甲斐無さに対する呆れ。

S t. ヒルデ魔法学院中等科一年の実技成績最下位。

これは、中等科へ進級した現時点での暫定成績だ。

まあ簡単に言えば、初等科の最高学年で最下位の結果を残している、ということである。

最下位は俺の指定席で、この順位以外は取った覚えがない。

優秀ならば当然目立つが、その逆もまた然り。
別に目立ちたくもないのに、目立ってしまう。この目立ち方は不名誉なので、喜ぶべきではないことは明白だろう。

新しいクラスを早々と確認して、回りの生徒達のように一喜一憂することもなく自分のクラスへと向かう。

誰が何組かなんて些細な問題だ。

精々陰口叩くようなクラスメイトが少なければ良いなあ、なんて言う希望があるくらいのものだ。

廊下を歩いていても、自分の存在だけが浮いているような感覚を覚える。

周りの喧騒とは別に響き渡る、廊下を靴底が叩く音。

その音だけが妙に異質に感じてしまう。

廊下を歩いているだけで、辺りの人間がわざわざ道を通してくれたり、よく分からないけど謝られたり、すれ違い様に舌打ちされたり。学院内においての俺の立ち位置なんてのは、入学当初からずっとこんな感じだ。

誰からも嫌われて、おおよそ友人と呼べる存在もなく、独りで居る。まあ、ようは根暗なわけだ。

中等科の建物は初等科とは異なるため、周りをキョロキョロと見渡しながらかく。

とは言え、初等科棟の造りとは、どこことなく似ているため、ある程度の位置情報は掴めた。

真面目な優等生ならば、初等科後期にあった、中等科棟見学のイベントでこの建物の構造を把握している事だろう。生憎、俺はそんな生真面目な学生ではない。

かと言って、そこまで不真面目な学生でもない。

周りからは、不真面目、不良、問題児、なんて風に思われている。俺としても、そう思われるであろう節が幾つも思い当たる。

「——っと、ここか……」

考え事をしながら歩いていたため、危うく通りすぎるところだった。中からは喧騒が響き渡って来ている。

どういう反応をするか分かってはいるものの、少しは緊張する。

人の印象は第一印象で決まると言う話もある事だし、ここはいっちょ爽やかな作り笑顔で教室に入る事にしよう。

「よし……」

意を決して教室に踏み込むと、一瞬教室全体が重々しい雰囲気になる。

その後、何事もなかったかのように会話が再開される。

幾つか視線を感じるが、きっと俺が会話の肴にでもなっているのだろう。役立てたようで何よりだ。

そして何より、さっきの魂胆がまるで役に立たなかったらしい。

あんな本を無駄だと分かっているながら、熟読していた自分が恥ずかしいなあ。

何が、“第一印象は目で決まる”、だよ……

俺の場合、悪い噂が先行しすぎて、アテにならんぞ。

どうやら今年も、改善される事なく1年を過ごす事になりそうだ。

始業式的なイベントを終えて、今日は解散。

万国——いや、あらゆる世界を通してお偉いさんの話は長いものらしい。

ある意味、様式美なのかもしれないな。

俺は図書館へと足を運ぶ事にした。

こう言った特別な教室、施設は、初等科、中等科で共用している。

この学院には、ベルカ式の魔法技術関連の書物が特に充実しているため、放課後はちよくちよく利用させてもらっている。

聖王教会のお膝元で運営されているから、ベルカ式関連が揃ってるんだろうな。

普段中々お目にかかれない古代ベルカ式関連の書物だけでなく、古代ベルカの歴史書なども充実している。

一説によると、無限書庫から寄贈されている本もあるらしい。

流石は聖王教会、流石は歴史あるSt. ヒルデ魔法学院。

無限書庫の方にまでコネがあるとは驚きだ。

寄贈が珍しい事なのかは知らんが、少なくともそんなに頻繁にある

事じゃないのは事実だ。

図書館に足を運ぶ理由――

何百年なんて単位で見れば、俺のような悩みを抱えた人も大勢いる。魔力運用関連の知識なんかは、彼等の経験を糧として勉強させてもらっている。

その彼等が記した本を読む事で、少しでも前へ進めるように……

「またハズレ引いちまったな……」

図書館で本を読みはじめてから一時間程経過したところで、ポツリと独り言のように呟く。

新書で“ミッド式及び近代ベルカ式の使える！100の魔法”というあからさまにハズレ臭漂う題名。

そのくせ、値段の方は結構高め。

やっぱ専門書ってのは高いもんなんだなあ……

そう思いつつ、出版社と著者名を確認。

この二つの名称が一致する本の閲覧は、今後控える事にしよう。後書きを見ても、そこまで知識のある人物のようには思えない。加えて、殆どの項目が別の本から直接引用したような手抜き。

誤字や脱字も目立つ上に、現段階で証明されていないような事項に
関しても、そうであるかのように書かれている。

「ま、金も払わずに読んでるんだし、文句言うのはおこがましいか
……」

根暗な性格故か、他人の揚げ足取りに関してはかなり自信がある。
傲慢にならねえよなあ……

パラパラと本を軽く読み返していくと、大きく取り上げられている
魔法があった。

それを見て一言――

「こんな魔法使えるか……」

見ているのは射撃魔法関連の項目。

中距離の、しかも誘導射撃って……一体どれほどの魔力を消費する
と思ってるんだよ。

魔力量の少ない俺からすれば、魔力の塊を飛ばすような射撃魔法は
そう易々と使えたもんじゃない。

それにただ飛ばすだけなら大抵当たらないし、簡単な防御魔法一つ
で完封される。

故に基本的には、膨大な魔力を利用したバリア無視のゴリ押し、バ
リアブレイク効果、誘導機能なんかを備えるモノが多い。

当然そんな複雑術式満載の魔法は、消費魔力が桁違いに多くなって
しまう。

まあ、男としては超長距離砲撃魔法なんてのは憧れるよなあ……
魔力の少ない俺にもっとも適した魔法は――

「やっぱ、これだよなあ……」

本の目次にある、その項目に自然と目が行く。

――身体強化

魔力による運動能力の向上で、消費魔力自体は基本的に少ない。
消費魔力が少ないとはいえ、どれだけ向上させたいか、身体の魔力
疲労限度、魔力特性、魔力効率などなど考慮すべき点は非常に多い。

しかし、この戦闘スタイルだと実質的な攻撃可能範囲はクロスレンジからミドルレンジが精々で、ロングレンジ型相手にはまるで歯が立たない。

近づく前に殺られるのが、容易に想像できる。

アレを使えば、相手自体は楽なんだけど。

寧ろ使ってるときは、近接型の相手の方が厄介だから、何とも皮肉
と言うか……

それ以前にクロスレンジ、ミドルレンジ——つまり、同じレンジであつたとしても、強化に割ける魔力が少ない俺は力負け必至な上に、ロングレンジの砲撃魔導師の強固なバリアは真正面からじゃ破壊不可能。

近距離、中距離、遠距離——いずれの状況であつても勝てる見込みなんて1%あれば良い方だ。

結局のところ、俺が魔導師相手に正々堂々と勝負して勝利するなんて、絶対にあり得ないってわけさ。

パタンと本を閉じて、天井を仰ぐ。

だが、それはあくまで真正面から向き合つて勝負した場合の話。

俺はまともに——真正面からやり合うつもりなど毛頭ない。

どんなに卑怯だと言われようが、俺は勝つためなら何だってやる——ってのは大げさだが、勝つための最大限の努力はするつもりだ。

いや……今までそうして来たんだがなあ。

いかんせん結果が伴わない。

やはり、いい加減魔導師になるって夢はすっぱり諦めるべきなのだろうか？

いやいや……まだ可能性がないってわけでもないんだ。

これから一気に魔力量が増える可能性だって、ないこともないし……

「そういえば、ヴィヴィオって自分専用のデバイス、持っていないだよね」

「それ、フツ一の通信端末でしょ？」

「そーなんだよー。うちのママとその愛機がけっこー厳しくって」

ふと考え事をしていると、学院初等科の生徒たちが話し込んでいる姿が視界に入った。

先程も触れた様に、図書館は共用している施設の一つ。

初等科の生徒が居ると言うのは何らおかしくもない事だ。

ああ、ちよくちよく図書館で見かける子たちだな。

特にオッドアイの子。

目を細めて彼女を視る。

変わってるよなあ……魔力光が虹色だろ？

彼女以外で見た事がない。

かなり珍しいな。

血液型診断、みたいなノリで魔力光診断なんてのも存在するらしく、
クラスの子はそれで盛り上がっていた。

魔力光診断で、虹色なんて項目あるのだろうか……？

俺の場合、見なくても結果はある程度予想出来ちゃうんだけどな。
根暗な俺にピッタリの魔力光だしさ。

ちなみに俺が、魔法を使ってもいない相手の魔力光の色が分かるの
にも、ワケがあるんだが……ま、今は語るほどの事でもない。

本当に些細なことだ。

パタパタと先程の女の子たちが、目の前を急ぎ足で通過して行った。
ふと、オッドアイの子と目が合う。

ペコリ

笑顔で会釈された。こちらの軽く頭を下げる。

綺麗な髪がサラリと肩から落ちる。

窓から差し込む夕日に照らされて幻想的な美しさを醸し出している
も、“綺麗だ”なんて簡潔な感想しか出てこない。

若いなあ……

その割に礼儀正しい子だ。

「ヴィヴィオ、今の人知り合い？」

「ううん。図書館でよく見かける人。さっき騒いじゃってたでしょ」

「リオ、気付いてなかったの？いつも見かける先輩だよ」

他人の会話に聞き耳を立てる、と言うのは自分でもどうかと思うが、勝手に耳に入ってくるものは仕方がない。

どうやら、向こうもこちらの顔を覚えていたようだな。

ツインテール、ショート、ロングヘアーの先程の3人組は、学院内じゃあ結構有名だったりする。

その容姿もそうだが、魔法関連の成績がトップクラスだ。

それにオッドアイの子は、あの“高町なのは”の娘だそうだ。

オーバーSランクの空戦魔導師で、砲撃魔導師の典型みたいな人だと聞き及んでいる。

かのJS事件の解決にも尽力した、非常に優秀な人だ。

彼女の魔力の10000分の1でも俺にあれば……いや、10000分の1でも良い。

「くっだらねえ……」

ポツリと呟く。

優秀な人とばかり比較して、地味に落ち込んでいる自分がバカバカしくなってきた。

ついでに、嫌気も差してきた。

俺は俺だ。

だから別に気負う必要なんてないし、俺の生き方を否定するなんて他人にはできない。

再び天井を仰ぎ見る。

俺にもたった1つだけ——“切り札”と呼べる代物がある。

「……………」

目を閉じた。

視えたのは一筋の光。

第1話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

あらすじの項目にも書いてありましたが、再投稿作品です。

設定がある程度被っていても、展開が全然違うから問題なし。と言う意見を沢山いただきましたので、再投稿するに至った次第です。これに関して問題がある場合は、感想かメッセージの方へお願いします。

その際は、具体的な問題個所などを提示して頂けるとありがたいです。

設定などは消去前と一切変更はなく、説明や会話文の追加。

今回は前回より3.57KB増。

展開が様変わりする事はないと思いますが、戦闘シーンに関してはかなり書き直す事になると思います。感想を頂けると凄く嬉しいです。

では――

第2話

「よし——」

日が暮れたのを確認してから、家を出た。
母さんにバレるとまた怒られそうだけれど、幸い今日は遅番なので、
後4時間は帰って来ないだろう。

母さんとは言っても、実の母親ではない。
実の両親を亡くした俺を引き取ってくれたんだ。
でも血の繋がりのないのは多少はあるだろうな。

何せ、俺の実父の妹が今の母さんなのだから。
だから、戸籍上親子関係になっても名前の変更なんかは一切なかったわけだ。

ちなみに行く先は公共魔法練習場。

その名の通り、魔法を練習する場所なわけで。

昼間はそこそこの利用者数を誇っているが、日が暮れると流石に利用者に限られてくる。

巡回中の局員さんに職務質問されて、補導された経歴もあったが……

その時、何故か指紋を採取されたんだが、俺はそんなに凶悪な顔を
しているのだろうか？

まあ、この際どうでも良いや。

今は練習が優先だ。

そもそも練習とは言っても、毎日決まったことを繰り返すだけの単
純なもの。

ただ、ひたすらに“魔法を展開する”ってだけの本当に単純な作業。

魔法行使の際には、術式を構成した上で、ようやく発動する事が出
来る。

術式の構成時間を限りなくゼロにすることで、使おうと判断してか
ら、実際に魔法を展開時間までの時間差を解消しようってのが目的
なわけだ。

それこそ、身体で覚えるくらいに繰り返せば良いんだ。

そしてその短縮技術を用いた魔法展開の事を、瞬時展開と言う。

ミッドチルダ式やベルカ式なんて、種類に違いはあるが、それはプ
ログラミングで言う言語の違いのようなものだ。

その言語を組立てたものが術式だ。

だから同じような効果を得るための魔法であっても、両者で術式は
異なる。

最近は大雑把にミッドチルダ式、ベルカ式の事自体を術式と呼んで
区別することも往々にしてあるようだが……

魔法の瞬時展開自体は一応、高等スキルに分類されてはいるが、それ自体をデバイスに任せても差し支えがない。

最近のデバイスはアホみたいに拡張容量があるからな。

数個の魔法程度なら術者——つまり、持ち主の合図1つで、瞬時展開と同等の効果が得られる。

拡張容量ってのは、デバイスに設けられた通常運用外の記憶容量のこと、PCで言うところの外付けハードディスクみたいなものだ。専用デバイス持ちなんてのは、魔導師全体の中でも少ない。オーダーメイドで作られる、専用デバイスは非常に高価な品だ。どの魔導師も持っているわけではない。

この世界では、専用デバイスを持つ事が魔導師達にとっての憧れでもある。

その点を鑑みれば、優秀な相棒を持った俺は、かなり恵まれている方だろう。

普通の魔導師は汎用型デバイスを扱うのだが、これらのデバイス使用者は、拡張容量を用いて各魔導師の個性に合わせている。

そして、状況判断を行える人工知能を搭載したインテリジェント型デバイスならば、使用者の危機的状況に反応して、デバイスの判断で防御魔法を使ったり出来る。

一昔前は、デバイスが使用者に合わせるんじゃなくて、使用者がデバイスに合わせるのが主流だっただけに技術の進歩を感じるなあ……

とはいえ、俺のデバイスの拡張容量には十分な余裕がある。

魔法の瞬時展開をデバイスの媒介なしに行うための鍛錬するのは、理由がきちんとあるんだが……まあ、出来れば理由は聞かないで頂きたい。

モノログで長々と語っている間に、公共魔法練習場に到着してしまったではないか。

「さて、はじめるか——って先約が居るのか」

金髪と栗色のサイドテールお姉さんコンビ。

にしても、あの栗色サイドさんはどこかで見たことがあるような気がするんだが……？

この練習場に来てるって事は、街中ですれ違っていても不思議じゃあないしなあ。

あまり、注視していると失礼なので、充分に距離を空けてから練習を開始することにしよう。

「んじゃあ、今日も宜しく——竜驤虎視^{りゆうじょうこし}」

竜驤虎視——俺のデバイスの名である。

汎用型ではなく、先行試作機のデバイス。

パーツ自体も規格外のものが多く、定期メンテが非常に面倒なのだが。

汎用タイプなら、パーツが一般流通してるから、自分で整備したりできるんだが……この竜驤虎視に限って言えば、一般流通しているパーツの方が少ないという代物である。

製作サイド的には、技術のブラックボックス化のためだとか言い逃れしていたが……

第5世代型デバイスの先駆けとして開発したらしいのだが、どうにもコレは失敗作というか、量産には不向きらしい。

あそこの研究所も人手不足だしなあ。

局のお膝元で研究開発してるわけだから、当然色々制約が付くしな。

第5世代型が一般普及し出すまで5年ってとこか？ いや……他の研究機関もあるわけだから、競争もあって、もうちょい早くなるかな。

それ以外にも、早急に作らざるを得ない状況になったりとかで、早まる可能性もある。

例えば、大きな犯罪だったりとかだけど……

無い事を切に願うよ……本当に。

《モノローグ長いですよ。それと、私は第4・5世代型ですからね》

竜驤虎視が悠長に喋り出す。

研究所の人の趣味らしいが、美少女ボイス——アニメ声というヤツだ。

「その甲高い声は止めてもらえないだろうか？」

《無理ですね。中の人はプロの声優さんですよ。声をサンプリングしたのですが、いかんせん機械ですので応用がききません》

「中の人なんていないんだよ……」

《主は小さい頃、着ぐるみの中からおっさんが出てきてショックを受けたクチですか？》

「俺は世界の厳しさを垣間見たね。今思い返すと、戦隊ヒーローモノでピンクのお姉さんが戦闘シーンで明らかに太っていたりするよね」

《そうですね。せめて女性のスタントを使って頂きたいです》

「——ところで、リョウコさんや」

《はい？》

リョウコというのは竜驤虎視の愛称である。

“リュウジヨウコシ”だけでなく“リョウジヨウコシ”とも読むらしいので、そこから適当にとってリョウコだ。
俺の名字が涼で、こいつがリョウコってのは若干被ってる気がしなくもないが。

「そろそろ練習をしたいんだけど……」

《どうぞ、ご自由に》

「分かった。おかしなところがあつたら言えよ？」

《ええ、勿論》

数個の小石を掴んで、高々と放り投げる。

暫く経過したところで、もう一掴みを放り投げる。

《円周率の小数点以下第3位の数値と第10位の値を足して、2で割った数値は？》

えーと、3. 1415926589……だから――

「5」

答えると同時に、ミッドチルダ式魔法の初歩の初歩であるラウンドシールドを上空へ向けて瞬時展開。

当然、落ちてくる小石はその効果により、俺に直撃することはなく、そのシールドによって弾かれる。

すぐさま、魔法を解除。

コッン、と小石が地面に落ちる音がした。

《ネイピア数の小数点以下第2位から、第4位まで足し合わせた数は？》

何で、こう超越数ばかり出すんだよ？！
もつと、時事問題とか色々あるだろうが……！！

えーと――

気を抜く暇もなく、再び出題される問題。
とある技能を身に着けるための訓練なのだが、一向に進歩の兆しが見えないのが、気がかりではある。

「9？」

自信がないので、控えめに答える。
同時に、再びシールドを展開したのが――

「……」

何かが頭に当たったような感覚。
そして、コツンと地面に何かが当たる音。

《一応、私がある程度威力を落としておきましたけど……？》

「だろうね。そこまで痛くない」

リョウコが勝手に判断して防御してくれたらしい。
これが先程軽く触れていた、デバイスによる擬似的な瞬時展開ってヤツだ。

俺はこれを、擬似・瞬時展開なんて風に呼称している。

《それに、答えも違ってますし。正しい解答は11です》

「勘だったんだよ……」

《そもそも、この鍛練方法が正しいのかすら分かりませんよ》

「それは言わない約束だ。気休めでも、やることに意義があるんだよ。努力して結果が出ないのなら、泣き事言っても許されるしさ」

《単位取得にその言い訳が通用しないと思いますが》

「俺はまだ中等科だから単位制じゃないんだよ。まあ、成績悪けりや補習はあるが」

《それは知っていますよ。去年の実技科目補習を3つほど受けてたじゃないですか》

「……………」

実技科目は魔法関連のもので、基礎的な魔法を練習するものである。一昨年くらいまでは、俺の得意とする魔力消費の少ないものが中心だったわけだが……去年に入って射撃、放出系が入って来たので、魔力枯渇でぶっ倒れることが多くなった。

《大体、思考しながらの瞬時展開なんて、局のエースクラスでもなければ無理ですよ》

「展開自体は問題ないんだが、術式構成と別の思考の並行はやっぱり無理か？」

《一度に2つの問題の答えを導き出すようなモノですよ》

ポリポリと頭をかく。

かれこれ2カ月程この練習を繰り返しているが、一向に成功する気配はない。

「座標指定なしの広域展開が楽に出来るなら、これも可能だと思っただがなあ」

《普通は腕を伸ばすなどして座標位置指定を省いちゃってたりしますもんね》

「一対多を想定した場合だと、両手塞がった状態で攻撃される可能性も十二分にあるから、必要だと思ったんだが」

《そういうのは、一対一でまともに戦えるようになってからやるべきかと》

「手厳しいなあ。いや、この場合は口厳しいとでも言うべきか……？」

《上手い事言えてませんよ》

「分かってるよ、そんな事は。でも、マルチタスクはエースクラスの魔導師なら会得しているらしいし……」

術式構成には頭を使う。

問題を解くのに頭を使う。

このように、複数の思考行動・魔法処理を並列で行う事でマルチタ

スクを会得しようと言うのが俺の魂胆だ。

俺は、マルチタスクは魔法の展開高速化において、欠かす事の出来ない要素であると考えている。

《複数の術式を同時に組める主なら、充分にマルチタスクを習得していると言っても良いと思いますが……瞬時展開を思考と切り離しての展開は、マルチタスクじゃなくて、単に反射の問題になって来ていると思いますが》

「え、そうなの？」

《主は器用貧乏と言いますか……魔力量さえあれば、優秀な魔導師だったでしょうに》

「そういうのは何度も考えた事があるけど、結局魔力量が多かったら今ほど努力なんてしてないと思うよ」

《そうでしょうか？》

「それに、俺が同時に複数の術式を組めたりするのは、扱う魔法自体のレベルが低い事が要因だろう。だから一般の魔導師さんのマルチタスクと同列で語っちゃいけないんだよ……」

《………》

待機状態の竜驤虎視が光を放っている。

成る程……

ゆっくりと首元に手を伸ばし、一呼吸置いた後に振り向いた。

リョウコの無言と先程の光は、警戒を促すもの。
この場合、恐らく背後に誰かいる筈――

「――ッ!!」

振り返ると、近くのベンチから先程のサイドテールお姉さんがこちらを見ていた。

表情自体は笑顔そのものなのだが、どうにもその……観察されてる
というか、値踏みされているというか、そんな類の視線を感じる。

目が合う。

「……………こんばんは」

取り合えず挨拶。

「こんばんは」

夜風に金色の髪が靡く――何とも絵になる光景だ。

だが、妙な違和感がある。

「……………」

しかしどうしたものか。

初対面の、しかも年上相手だぞ……？

「えっと、その……今日図書館で会いましたよね？」

図書館？

俺が図書館で会った人物は10人もいないし。そもそもこんな年上の人なんて……

あれ……？

彼女の傍には白い物体がふわふわと浮かんでいる。

あれは——兎？

って、兎い……？！

っ、疲れてるのかな……練習のしすぎか？

目をごしごしと擦ってからもう一度見る。

相変わらず、兎のぬいぐるみがふわふわと宙を舞っている。

《わぁー、すごーいふぁんたじー（棒読み）》

魔力を食らって勝手に念話なんぞすんじゃないやねえ……

魔力が勿体無いので、念話による抗議も出来ない。取り合えず、抗議代わりに待機状態の竜驤虎視をデコピンしておく。

第5世代型なんだから、その機能使って念話すれば良いものを……

にしても——さっきの違和感……魔力か？

ふと、彼女から魔力が微かに漏れ出しているのを感じ取った。

片目を閉じて、その根幹を盗み視る。

虹色に輝く光と、幾つもの光の筋。

魔力光が虹色……ってどっかで見たことがあるような？

それに付け加え、この感じは——

「——変身魔法？」

「……あっ！クリス、モードリリース変身解除！」

そう告げると、彼女が眩い光に包まれる。

一瞬何か見えてはいけないモノを見た気がしなくもないが、きつと口に出すべきではないのだろう。

光が収まると、そこには昼間に見かけた少女の姿があった。

「よく図書館で見かける子か!」

「はい。でも何で、変身魔法だって……?」

「感知は得意分野だからな」

年上でもないのに敬語を止めることにした。

「凄いですね」

厳密に言うと、ある能力の副産物なんだけれど。

あんまり言いふらすとロクなことにならないということは、よくよく知っているの、一応は隠している。

「自己紹介がまだでしたね。高町ヴィヴィオ。S t. ヒルデ魔法学院初等科4年生です」

「市ノ瀬涼、中等科1年だ」

俺が名乗ると、何かを思い出したような表情をする、高町。

ああ……俺が彼女の存在を知っているように、彼女もまた俺の存在を知っているわけか。

学院内のトップクラスの才能を持つ人間と、学院内ワーストの人間。陰と陽、真逆の存在。

「互いに名前と噂は色々聞き及んでいるみたいだな」

「えっと……そうですね」

彼女は少し気まずそうに笑ってから、頬を人差し指で掻く。そんな仕草も妙に可愛らしく感じるのが、美少女クオリティー。

「別に学院内最下位の成績を誇るんだから、馬鹿にしてもらって構わないぞ。寧ろ下手に擁護される方が迷惑だ」

「そういうのじゃなくて、噂を聞く限りでは何にも努力してない上での結果かと思っていたので、意外というか……」

「努力しなくて最下位ならこちらとしても納得できるんだがなあ。努力した上での最下位はかなりへこむぞ」

互いにベンチに腰をおろす。

家族以外の人間と話すのは凄く久しぶりな気がする。

「そっちは、身体強化系の魔法練習か？そっちの兎さんは——」

「わたしのデバイスで——セイクリッド・ハート、愛称はクリスです。今日貰ったばかりなんですけどね」

「成る程な……魔力制御は上手だったんじゃないか？」

彼女のデバイス——兎のぬいぐるみがえっへんと胸を張る。

どこかのデバイスなんかより可愛げがあって良いなあ、と思いつつ頭を撫でてやる。

まあ、あくまで“はじめてにしては”というレベルだが。

現状では……とてもじゃないが、実戦導入はお勧めできない。

色々穴はあるが、その辺りの問題は時間をかけて解決していくものだ。

下手に口を出してしまえば、彼女のスタイルが崩れてしまう可能性だってある。

長い目で見るのが一番だろうよ。

第5世代型デバイスの機能の特性から、魔力制御や魔力管理を、自身の魔力特性からは、魔力節約を気にしなくてはならない。

そんな生活をずっと続けて来ただけに、つつい辛い辛口な評価を述べてしまうだろうし……

「見てたんですか？」

確かにさっき“視た”から分かったわけなのだが……

彼女の“見た”とは言葉は同じでも意味合いがきつと違うだろう。

「まあ、な……」

「そちらは瞬時展開、ですよね？」

「そう。ただし展開速度重視しちまったから、防御力自体は本来より2割減ってとこだな」

「術式に手を加えてるんですか?!」

驚くほどのものなのだろうか……？
いや、驚くほど愚かな行為だからか。

普通、術式自体に手を加えることなんてないし……一般に浸透している魔法は、様々な改良を経て今の状態に落ち着いたので、限りなくベストに近い。

通称は術式改変という呼称で呼ばれることが多い。

俺のは術式改変というよりは壊変と言った方が近い。
改良というよりは、改悪でしかないのだから。

「本来の力を生かさずに、殺してるんだけどな。そういや、さっきもう連れの人居なかったっけ？」

辺りを見渡すが、俺たち以外に人影はない。

少々気がかりがあるとすれば、未だに続くこの独特の違和感——魔力の存在。

「本当だ……ママがいない？」

オイ、待て。

今凄い発言が飛び出したぞ……

高町ヴィヴィオの母親と言えば、かの有名な高町なのはさんではないだろうか？

それが先程まで、この空間に存在していたと？

俺と彼女以外の魔力が微かに探知できたことも、どうでも良く感じるほどの衝撃の事実。

うは！すっげえ、テンション上がってきた！！

「かの有名な高町なのはさんに、適切な魔法訓練法でもご教授して頂きたかったなあ……」

「ママのは結構厳しいですよ？」

「だろうね。噂は聞してる」

それから暫く、雑談を交わしつつ時計に目を向ける。

おおよそ、小学生がうろついてて良い時間はとうに過ぎ去っている。

途中で切り上げるべきだったか……？

いや……だが、未だにどこの誰とも分からないヤツが魔法を行使してるわけだし。

会話開始直後から例の違和感は未だに続いている。

最初は目の前の変身魔法のモノだけかと思ったのだが、彼女がそれを解除した今もその違和感がある……と言う事は、原因はまた別に存在する筈。

魔法を使っているってのは間違いないんだが、具体的に何を使っているかまでは掴めない。

アレを使うって……気が引ける——と言うより、出来る限り使いたくはない。

怖い、からな……

「相変わらず弱いよなあ、俺は……」

二重の意味で弱いんだ。

「よしっ」

勢いよく、立ち上がる。

「？」

「そろそろ、帰った方がいいだろ。この時間に女の子1人なんて褒められたもんじゃないし」

「そこまで心配してもらわなくても……」

「お前自身は心配なくても、俺は心配なんだよ。まあ、一番心配してるのは母上だろうけど」

「そーです、かね？」

首を傾げる仕草もまた可愛らしい。

「では、また学院で——！」

「あっ——ちよつと！送って……」

俺の言葉など耳には届かなかったのか、パタパタと元気よく駆け出して行った。

《あらあら、フラれちゃいましたね》

何故か嬉しそうな声でそんな事を言う。

「どうやらそのようだな——リョウコ、この違和感は何だか分かるか？」

《断続的に一定の魔力量の消費が感知で来たのなら、フィールド系か単なる監視じゃないですか？》

「問題は距離だよなあ。俺の感知距離を超えている上に、あの子にも一切感付かせていない」

《少なくとも200メートル以上は離れているわけですよね》

「いや、ちよつち集中して感知したから300以上だ。距離自体も曖昧だけど……それに、こちらが本格的に感知距離を伸ばそうとしたら、違和感が消えた——つまり、魔法使用を中断させたって事だ……こちらが何をしているのかも、丸々お見通しというわけらしい」

《化物ですねえ》

「実力的なものを鑑みると、考えられる人物は——」

《成程、彼女ならば——余裕でしょうね》

「ちょっと戯れが過ぎますよ、教導官殿」

溜息混じりにそう呟いた。

自身の得意分野ですら、届かなかった——

それでも妙に清々しい気分だった。

「ヴィヴィオー」

「あ、なのはママー。どこ行ってたの？」

「お邪魔かなーと思って。ママより先にボーイフレンドを作るなんて、生意気だぞー」

「そ、そーいうのじゃないってば。ママにはユーノさんがいるでしょう!」

「ユーノ君がそういうのじゃないから」

「うわ……顔色1つ変えずに言ったよ。ユーノさんも可哀想に」

「んー？何か言った？」

「ううん、何にも。それよりずっと見てたってこと？」

「ちよつと遠くから娘の成長を見守ってたの」

「それは一般的には監視というのでは？」

「でも彼凄いな。この距離からでも気付いてたみたいだし」

「練習場からすっごい離れてるのに?!」

「距離としては340メートルだね。探知魔法も使わずに、そこま
で感知できるなんて正規局員でも見たことないよ。あの様子からす
ると、まだ隠し玉がありそうだけど……」

「感知スキルかぁー、今度コツでも教わろうかなあ」

こんな一幕もあったり、なかったり。

第2話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は前回（消去前）より+2.30KB。

手直しする箇所は1話目より少なめ(?)でした。

マルチタスク云々の項目を追加しました。消去前はあくまで“展開速度”のための訓練でしたが、今回は“マルチタスク習得”のための訓練に変更。結果として、同じような目的になるのですが……複数の思考を並列して行えるなんて、人間技じゃない気がします。必須事項っぽいので、一応練習してもらおう事にしました。

3話も現在加筆修正中ですので、長い目で見守って下さると嬉しいです。

では——

第3話

「ふわ……」

お世辞にも上品とは言えないほどの大きな欠伸。

退屈な授業を一通り終えてから、帰宅の準備をはじめめる。

退屈な――などと表現すると、まるで俺の授業態度が不真面目かのように思われるかもしれないが、そんな事はない。

座学に関しては一応の知識は持っているつもりなので、退屈と感じるだけだ。

卓上には先程配られた、小テストの答案用紙。

67点という実に微妙な点数である。

可もなく不可もなく――まあ、いつも通りだ。

「67点かぁー、平均点よりちょっと低いくらい？」

不意に背後から声がしたので、思わず身体が反応してしまった。

「嫌だなぁー、そんなに身構えなくても」

右手で待機状態の竜驤虎視にそっと触れ、左手で胸ポケットのそれを掴んでいた。

リョウコの待機状態はシルバードッグタグ。

元々は軍隊における兵士の個人識別用に用いられていたものだ。

刻み込まれているのは、アルファベットと数字の羅列――と、かなり小さく跳ね馬の印がある。

型番、アセンブリ設計完了日時、初起動時の日時、開発責任者の名前、研究施設の名称。

印に関しては、製作者さんの証、落款のようなものらしい。

「いや……背後から急に声をかけられたら、普通身構えますよ——シスターエリーゼ」

俺の通うSt・ヒルデ魔法学院は聖王教会お膝元の施設のため、シスターさんが多く在籍している。

彼女、シスターエリーゼもその中の1人である。

机の上に行儀悪く座り込み、腰まで届くほどの赤髪を指で遊びながら、悪戯な笑みを浮かべつつ言った。

「その手に持ったボールペンは、どうするつもりだったのかしらねえ。思いっきり先端をこちらに向けてるし……」

左手に握られていた万年筆を指して、シスターエリーゼがそう言った。

これは爺ちゃんが12歳くらいの頃、元服祝いだとか言って、渡してくれたものである。

不器用なのだが、こういう面を見ると、つくづく「父さんとは似ても似つかないなあ」、なんて風に思ってしまう。

「ペンは剣よりも強し、なんて言葉もありますし」

「涼君は背後から声をかけた人間に対して、こんな真似をするのかなあ……?」

「俺の背後に立たないで下さい」

「それ、どこのスナイパー……？それに、リョウコちゃんを利き手である右手に添えてる時点で、ペンより剣を取っているじゃない」

「むう……よく見てますね」

「気になる男の子ですもの」

「そりゃあ、どうも」

「そっけないわね。年上のお姉さんは嫌い？」

「嫌いじゃないですけど……」

「それは良かった。じゃあ、もう少し面白いカンケーになってみる？」

ずいっと、彼女の顔が眼前にやって来る。

距離にして僅か5センチほど。

何かの弾みでぶつかってしまいそうな程の距離。

だけど、まず出てきた感想が色気のあるようなものではなかった。

目の下のクマに気付いたのだ。

化粧で少しは隠しているのだろうが、この距離ならば容易に見破れる。

視界には彼女の灰緑色の瞳。

クマの色は青っぱい——と言う事は、夜更かしが原因か……？

クマの色である程度原因が特定できるらしいのだが、果たして俺の見立てはあっているのだろうか？

だが、彼女の体調不良にしろ、寝不足にしろ、恐らく原因は仕事か……或いは、単に新作のゲームでも徹夜でやっていたのか……

少し心配になったので、さり気なく仕事の話題を振ってみる事にした。

「それより、学院の仕事はどうしたんですか？」

「私は雑用係だからねえ。そこまで忙しくはないわけよん」

その語尾はどうかと思うが、少なくとも学院内の仕事の原因ではないらしい。

となると、原因は……教会の方の仕事か？

「雑用……」

「掃除とかがメインかな」

「そう言えば、教会では何をしてるんです？」

「普段は介護施設の訪問みたいなボランティア活動がメインなんだけど、最近は別件で動かなくちゃいけないくてね」

「別件と言うと……？」

妙に意味深な台詞に聞こえたので、尋ねてみる。
恐らくこれが、寝不足の原因なのだろう。

「最近、とある傷害事件があつてね。その警戒のために夜出張してるのよ」

「傷害事件ですか。物騒ですね」

「格闘戦技の実力者ばかりを狙った犯行で、自称“覇王” イングヴァルト。実力はかなりのもので、前線部隊の魔導師も何人かやられてるのよ」

「イングヴァルトっていうと、ベルカの王ですよね」

クラウド・G・S・イングヴァルト、別名“シュトゥラの覇王”ベルカ戦乱期の王の1人。

ベルカの王っていうと他に有名どころは——聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトだな。

「しかし、自ら“覇王”を名乗る、か……」

「目的もよく分かんないし」

お手上げ状態と、両腕を軽く挙げて「困った」と呟くシスター・エリーゼ。

「あれ、目的は明確じゃないですか」

「ほえ？」

素っ頓狂な声を上げるシスターエリーゼを尻目に、自身の考えを語

る。

「格闘戦技の実力者の目の前で“覇王”を名乗るわけですよ。挑発じゃないんですか？さしずめ、自分の力試しと言ったところでしょうか？」

「おお！」

納得行ったのか、「うんうん」と頷く。

まあ、きっと彼女の上司さんはその事実気付いているんだろうけど。

しかし、表向きの報道はない事件だよな。

隠そうとしてるってことは、あんまり手がかりがないってことか。明らかに前線不向きな能力のシスターエリーゼにまで警戒の仕事がまわってきているという点を考慮すると、尻に火が付いた状態なのだろうか？

加えて、局員がやられたって言う情報を表向きにしたくないと言う、局意向もあるか。

確かに……局の信頼を守るために、局員が通り魔にやられました——なんて言いたくはないよな……

それに、犯人が“覇王”と名乗っている以上、熱狂的な聖王教信者の疑いもある——つまり、教会に批難の矛先が向けられる可能性もある。

これらの点を鑑みて、表沙汰にしない方が良いつて結論に至ったのだろう。

推測の域を出ないんだが……それ以前に、一般人の俺が聞いても差

し支えないのだろうか？
まあ、この際どうでも良いか。

「シスターも気を付けて下さいよ」

「安心なさい。力はないけど、ひ弱ではないから」

ウィンクして見せる。

いや……魅せるってのが、おあつらえ向きな表現かもしれない。

「――それに、わざわざクマの事に気付いて、事情を直接聞かないように遠まわしに話してたじゃない。そういう気遣い、お姉さんは大好きよ」

「む……」

やはり気付かれていたか……喰えない人だ。
もしかしたら、遊ばれただけなのかもしれんな……

ちなみに、彼女は結界魔導師。

相手を拘束することに関してはトップクラスの腕前だが、単独任務には向かない能力でもある。

ツーマンセル前提としての魔法が多い。

結界魔法は座標指定なんかがかなり面倒で、術式を組むのにかなりの時間が必要となるのだ。

「心配してくれるなら、私のピンチには主人公の如く駆け付けてく

れると嬉しいわね」

「俺は主人公なんて性質じゃないんですけどね。それでも、恩人の窮地くらいは救いたいと思ってますよ」

「冗談だったんだけどなあ」

「俺も冗談ですよ」

「酷ッ！」

「冗談言える上に、そんなテンションなら、心配なさそうですね。少し安心しました。シスターに体調でも崩されたら困ります」

「ほほう、困るのー？」

「ええ、そりゃあもう。学院内で唯一気兼ねなく話せる人ですから自分自身の皮肉に思わず苦笑いになってしまった。

「やっぱり—————ね」

「？」

シスターが何かを呟いたらしいが、残念ながら俺の耳元には届かなかった。

「なあーんでもない。それじゃあ、私は夜回りのための準備でもありますかな。後、涼君。手を抜くのも程々にしておきなよ」

手元の答案用紙を指でピシッと弾いて、机の上からぴょんと降り立って、掛け足で去って行った。

「まったく……元気な人だ」

そこが彼女の魅力でもある。

色々と見抜かれているようだし、敵には回したくないタイプだ。

「さて、どうするかな」

教科書やらノートやらを詰め込んだバッグを片手に、今日これからの行動について少し考えてみる。

ふと、昨日の高町の「では、また学院で——！」という台詞が脳裏によぎった。

「また学院で、か……」

気が付けば、歩みを図書館に向けていた。

下心がないわけではないが……慕ってくれる後輩と言うのは、どうにも可愛らしく感じてしまうものなのだ。

図書館は相変わらず閑古鳥が鳴いてる。

活字離れとは本当らしい。

最近は何でも電子化されているし、調べ物に関してもある一定のレベルであればネットワーク検索でどうとでもなるしな。

図書館に足を踏み入れると、独特の静けさと、ひんやりとした空気を
を感じ取れた。

蔵書の状態を維持するために、少し低めに設定されている室温。
軽く深呼吸をすると、古書特有の香りと新鮮な空気が肺一杯に広
がる。

「さて……」

視線を彼女の指定席である、窓側の席に視線を向ける。
そこにはいつもの3人組が、楽しげに談笑していた。

邪魔したら悪いな、と思い踵を返そうとしたところで――

「あ、市ノ瀬さん！」

ぶんぶんと大きく手を振る高町。

俺は諦めたように、肩を脱力させてから彼女たちの座る席へと向か
った。

途中、本棚に新書があったので適当に何冊か見繕う。

「昨日ぶりだな」

「はい。市ノ瀬さんに会うためにここで待ってたんですよ」

よく恥ずかしげもなくそんな台詞が言えるなあ……べ、別に照れて
ねえぞ?!

「できれば、彼女たちを紹介してくれると嬉しいのだが」

視線を彼女の連れに向ける。

「えっと、わたしはコロナ・ティミルです」

ツインテールで妙に気品がある。

続けて、隣に座っていた八重歯でショートヘアの子が自己紹介し始めた。

「リオ・ウエズリーです」

「中等科1年、市ノ瀬涼だ。ちなみに、想像通りの人物だ」

近くの席に腰を下ろしてから、そう告げた。

彼女達の視線は凡、初対面の人間に向けるものではなかった。

どこか警戒しているような、そんな視線。

警戒される覚えは……残念ながらあるわけで。

学院内の問題児なのだから、彼女達の視線も仕方ないだろう。

「昨日、ウチのママが見てるのに気が付いてたんですか？」

妙に興奮した様子で尋ねてくる、高町。

ウチのママって言うと、高町なのはさんのことだろう。

「ああ、やっぱり。アレ、高町さんだったのか。感知範囲から判断して、300メートル以上は離れてたからな……エースオブエースは伊達じゃないってことだな」

うんうん、と頷いて納得する様子を見せる。

まあ、望遠の魔法は砲撃魔導師にとってなくてはならない存在だ。長距離砲の照準だけでなく、現場把握などにも用いられる。

サーチャーでやる場合もあるのだが、それは魔力消費量が大きい。魔力で作り上げた、遠隔操作が可能なカメラと言ったところか。

サーチャーは基本球体で、魔力光を放っているため、相手に勘付かれる場合もある。

昨日のように暗がりでは、特に危険だ。

まあ、彼女クラスになるとサーチャーにステルス機能付いたり、サーチャー自体に望遠機能を備えていたりもしそうだが……

俺が勘付けただけでも、奇跡みたいなものだ。

今度は非お会いしたいものだ……サインも欲しいし、何より噂の集束砲撃魔法とやらをお目にかかりたい。

「――すごい!!」

「はい……?」

好奇心で目がキラキラさせている、高町。

これが野郎ならギラギラした目付きなのだろうが、美少女は何から何まで補正がかかって見えてしまうものらしい。

思わず目を反らしてしまうくらいに、可愛かった。

「どうして分かったんですか?! エリアサーチしていた様子もありませんでしたし」

「それは、その――企業秘密だな。唯一の特技を他人に教えるってのは、存在意義を奪われるのと同義なんだよ」

特に俺のは初見の相手にくらいしか、十全に能力を発揮出来ない。それに説明しようにも、こんな能力信じてもらえないだろうし。中々に難儀なものなのだ。

「うー、市ノ瀬さんの意地悪う」

や、やめてくれ。その上目遣い。

心が揺らぐから、勘弁してくれないだろうか……

だが、こちらとしても切り札は伏せておきたいのだ。もっとも、使う機会がないってのが一番なのだが。

「市ノ瀬、さんでしたよね……？」

ツインテールの子が申し訳なさそうな表情で尋ねた。怯えも含まれているのかも。

「ああ」

「本当にあの“市ノ瀬涼”なんですよね？」

「やっぱ、問題児とは一緒に居たくはないって事か？」

皮肉交じりに言ってみるが、年下の子に少し意地悪だったかもしれないと心の中で反省。

以後気を付けるとしよう。

1人でいることの方が多いから、他人と接するということ自体で一杯一杯なんだよ。

「いえ、その……聞いていた印象と全然違うから」

「高町もそんなこと言ってたな。別に成績が悪いだけで不良ってわけじゃあないぞ。努力した上での最下位だからなお性質が悪いとも言えるが」

「その……ごめんなさい」

いきなり頭を下げられた。

なんだ、この背徳感は……？

「えっと、俺が何か……？」

「ヴィヴィオが市ノ瀬さんと会って良い人で、また会いたいって言うってたから……」

もじもじと、制服の裾をひっぱたり握った込んだりしている。

この小動物的な仕草は……悪くない。うん。

「先輩の噂を聞いてたから、止めといった方が良いつて言っちゃったの！」

彼女の脇にいた、短髪八重歯ちゃんが声を張り上げた。

「なんだ、そんなことか。別に黙ってりゃ済む話だろうに」

「でも……」

「火のないところには煙は立たないって言うだろ？ 実際俺が善か悪って言えば後者だし。友人のためにそう言えるお前らは凄い。誇っているわ。ちなみに、暗に俺に友人がいないことを表現しているわ」

けではないからな!？」

「良いんですか？」

「そうですよ、だって先輩のことを噂だけで勝手に悪い人って思っ
て——」

「んー、その辺は価値観の違いじゃないか？ 第三者の評価なんて俺
にはどうでも良いことだし。まあ、納得できないなら俺が器の大き
いお兄さんだとも思うことだ」

「器の」

「大きな」

「お兄さん？」

3人が呟いて、顔を合わせる。

「何だ、その笑いを堪えたような表情は?!」

俺がそう叫んだ直後、笑い出す3人娘。

その反応は流石にショックだぞ……

「全く、急に笑い出すから何かと思ったじゃないか」

「すみません」

「あの短髪八重歯ちゃん、目がまだ笑ってやがるぞ。高町、何とかしてくれ……」

「わたしのことはヴィヴィオで良いですよ」

「はいい？」

「名前です」

「んなことは、分かってる………」

会って2日目の男に名前で呼ぶことを許可する、だと……？
いかなん、何かしらの罠か。

或いはこの出来事自体が夢の中の出来事——夢落ち、というフラグ
もあり得る。

カメラかサーチャーでも仕掛けられているんじゃないか？

「何、難しい表情してるんです。先輩？」

八重歯ちゃんがこちらの表情を窺うようにして尋ねてくる。
ちなみに、先輩と呼ばれてちょっと嬉しかった。

「いや……」

疑っていたという行為自体が、彼女に失礼だよな。
彼女の真っすぐな瞳を見て、思いを改める。

「ヴィヴィオ、これで良いな？」

確かめるようにゆっくりと名前を呼ぶ。

「はい」

「元氣な返事で大変よろしい。俺のことも市ノ瀬じゃなくて、涼でいいぞ。親しみを込めて、涼くんや涼ちゃん、或いはお兄ちゃんなんかの変化球でも良いぞ」

「では、涼さんで」

ちなみにお兄ちゃん呼称を微妙に期待していたのだが、それは今後のお楽しみとして取っておくでしょう。

「じゃあ、わたしのこともコロナって呼んで下さい。涼さん」

「じゃ、あたしのことはリオで。お願いします。先輩」

「お、おう……………」

よく分からんが、年下の美少女3人とそれなりに仲良くなれたようだ。

俺が学院で最も出来の悪い人間で、変な噂が立つ男と知った上でわざわざ名前で呼び合う関係を望むってのは奇妙な話だな。

どれだけ彼女たちは心は寛容なのだろうか……保護者が知ったら注意するぞ、多分。

第3話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

日曜更新の予定でしたが、予定より早く修正が完了したので本日投稿しました。

今回は前回（消去前）より＋3.62KB。

デバイスの待機状態に関しては適當。

クリスタル型だと、色とか形状とか色々描写が面倒なんry
時計とかにしたかったんですが、それだとエリオ君と被るので、男が身に着けていても問題ないようなものにしました。

ちよっと中二っぽい？

だって、主人公は年齢的には中二だからね！

裏設定があったりしますが、それに関しては気付いた人だけのお楽しみ。

シスターエリーゼとの会話をかなり増量しました。

若干伏線が増えてる気がしなくてもないですが、それに関してもその内回収していきます。

感想下さると嬉しいです。

では――

第4話

「へえ、じゃあみんなストライクアーツやってるのか」

ストライクアーツっていうのはミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技の一種である。

広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称であり、護身やダイエット目的ではじめる人も多いという。

何よりストレス解消に持ってこいらしい。

打撃による格闘技術ね……俺は苦手だな。

基本的に非力だから、技を学んだところで、それを100パーセント生かせないんだよね。

それに、「打撃による徒手格闘技術」と謳い文句を掲げているものの、競技者の多くは魔法による身体強化を施している。

ルール上、特に問題もない。

打撃でダメージを与えれば何でもOK、みたいな緩さだったと記憶している。

俺も強化は使えるが、魔力効率やら消費魔力の影響からか、一般の魔導師が使うものよりパフォーマンスは下がっている。

それに力技でダメージを与えるのではなく、基本汚い手で勝ちを取りに行くタイプの俺では敷居が高く感じてしまう。

ま、模擬戦にしろ実戦にしろ、勝ったことなどないのだけれど。

「明日練習あるんですが、一緒にどうですか？」

「んー、どうするかな……」

参考になるものが何かあるかもしれない。

技を盗むとかは無理だろうけど、相手がストライクアーツ主体だった場合を想定すれば、ある程度動きを見ておいた方が良さだろう。

基本的な動作が幾つか存在する筈だ。

その動きの初動を見極めて次に相手が出してくるであろう一撃を見抜く。

ありもしない実戦を想定しつつ、今回の件は良い機会だと思い込む。

ちなみに、美少女3人と休日デートできる！——なんて邪な気持ち
は精々8割くらいしかない。

「まあ、見学だけなら」

その一言に喜ぶヴィヴィオの姿を見て、心の中で嬉々としていた自分が妙に情けなく感じて……

俺は苦笑いしながら、ただ明日という日に期待感を抱いていた。

ああ、何と言うか……実に思春期の少年らしい煩惱だ。

翌日

ミッドチルダ中央市街地

「眠い……」

欠伸を噛み殺しつつ、待ち合わせ場所で待っていた。

約束の15分前だ。

実のところ、30分前から待っていたりする。

何だか、初デートではしゃいでるキャラみたいなことしてるな……

「寝むそうですね」

「ああ、コロナか。おはよう」

ツインテールを翻しながら、コロナが現われた。
フリルのあしらってある純白のワンピース。

服装からも“清楚なお嬢様”の雰囲気漂う。

「夜更かしですか？」

「ちょっと、知り合いのシスターさんの尻拭いに行っていたんだ」

昨晚、シスターエリーゼから「夜道の1人歩きは怖いから」と、数時間ずっと電話の相手していた。

彼女には大きな貸しもあるので、俺は二つ返事で付き合ったわけだが……

よもや、明け方まで付き合わされるとは。

それもただの雑談ではない。

深夜の巡視と言い張りつつ、公園でイチャイチャしてるカップルをずーっと観察してたり、野外での情緒などを映像を交えながら実況すると言う暴挙までやってのけた。

「ねえねえ、見た見た？！あんの若造、キスしよったでえー！！絶対入ってる！絶対舌入ってるって！！」

公園のベンチで口付けしていたカップルを、背後の木陰からサーチャーで激写しつつ、そんな事を叫んでいた。口調がおかしい上に、鼻息が荒く、「夜道が怖い」と言う女性のもではなかった。

あの人、本当にシスターなのだろうか……

「それより、私服も似合ってるな。すごい可愛らしい」

あん？

何故に顔を真っ赤にして俯いているんだ？

「……どうかしたか？」

「い、いえ……」

ここまで意識されるとは予想外。

まあ、異性として意識されているだけ喜ぶべきか。

年齢的には、まだ男女の垣根ないと踏んでいたのだが……最近の子供はおませさんなのかねえ。

《主が一番ませているような気がします……》

リョウコのツツコミが聞こえた気がするが、きっと気のせいだろう。俺の心の声など、聞こえる筈がないのだから。

聞かれてたら色々とマズい。

主に思春期特有の歪んだ感情とか、邪な考えとか……

「涼せんばーい、コロナー、おはよう！」

元気よく現れたのは、短髪で八重歯がチャームポイントのリオだ。ホットパンツからスラリと伸びた脚は実に健康的で、これまた彼女らしい私服であった。

やはり、服装には性格もある程度反映されるものなのだろうか？
まあ、俺はファッションだとかそんな類の知識は皆無なんだから、
言い切れないんだけど。

今考えると、集合場所にジャージ姿と言うのは些か難あるか？
髪にしたって、寝癖をドライヤーで寝かしつけて来ただけというも
ので、整髪剤などは一切使用していない。

こういうのに無頓着なのは、女の子から嫌われる要因となるかもしれ
ないし、今後は少しは気を使うべきか？

いやいや、わざわざ意識すると「何コイツ、私の事を意識してんの
？」なんて風に思われて、逆に距離を置かれるかもしれん……

と言うか、何で俺はこんなに年下の娘に翻弄されてるんだよ……
自分で勝手に悩んで、勝手に翻弄されて……ホントに惨めと言うか。
ある意味俺らしいっちゃ、らしいんだけどな。

でも、少し悔しかったりする。

だから、ちよっとだけ意地悪を試してみた。

「おはよう。リボン変えたのか？よく似合っているぞ」

「そ、そうですか……よく気付きましたね」

「そりゃ気付くだろ」

「コロナにも似たようなことやったんですよ？」

「ん？ああ、服装が可愛らしいんで褒めたんだが」

「成る程、だからあんな顔真っ赤にして俯いてもじもじしてるわけだ……」

「なんだ、あの程度で照れるのか？男に免疫がなさすぎるのも考えものだ。将来変なのにつっかかるぞ」

ニヤリと嫌味っぽい笑みを向ける。

ちよっとした意地悪のつもりだったが、予想外に可愛らしい反応が見られた。

「先輩がそれを言いますか」

「俺が“変なの”と言いたいのか」

「直接的表現は避けてたんですが、言って欲しかったんですか？」

「いや。でも2人とも可愛いつて思ったのは本当の事だよ」

爽やかな笑みを浮かべてそんな気障な台詞を吐いてみる。

柄じゃねえな……

自分で言っつて、ちよっと気持ち悪かった。
後ちよっと照れ臭かった。

こういう台詞は本当に柄じゃない……

「にゃははー、ありがと。先輩」

リオは軽くないしたが、コロナの方は黙ったまま、チラチラとこちらに視線を向けたり背けたりするという行動を繰り返していた。

いやまあ、小動物みたいで見てる分には保養になるから良いんだが

……

こんなに意識されるとは思わなんだ。

本当に免疫が無さすぎるのも考え物だと思うぞ。

加虐心が沸々と湧き上がって来る。

加虐心と言うのは、少々大袈裟か……言い表すなら、犬の目の前に餌を置いて、“待て”をしてその様子を愉しむのと似たような感情と言うか。

うん、将来変なのに引っ掛からないように、今の内にショック療法で耐性を付けておいてやろう。

勘違いしないで欲しい。

決して、自身の欲求を満たすためじゃないんだぞ？

彼女達のためなんだ。

よしッ！正当化完了ッ——！！

「……………」

じいーっと、コロナの方を注視する。

「……………」

視線を街を歩く人々に向け、髪の毛をやたらと気にしたり、情報端末を弄ったり、意地でもこちらと目を合わせないつもりらしい。

続いてリオの方に視線を移動させる。

「?」

目を合わせてから、可愛らしく首を傾げて見せた。
こういう反応が普通だと思うが……まあ、両方可愛いから良しとしておこう。

どうして年下の娘って、こう気にかけてくなっちゃうもんなのかねえ?

単に俺の性癖と言ってしまえばそれまでなのだが、保護欲とかそういう類の感情なのだろうか。

「リオ! コロナ! それに涼さーん。おまたせー!」

階段からパタパタと走って来るヴィヴィオ。

傍には彼女のデバイス——クリスが寄り添っている。

少々短めのスカートと、白いニーソックス。

その境界部分の肌が露出する箇所は、絶対領域とも呼ばれる。

ニーソックスとハイソックスを混同する人が多いようだが、前者は膝上、後者は膝下に届くものを言う。

そして、ヴィヴィオの身に着けているような、太ももまで届くニーソックスの事は、オーバーニーソックスやサイハイソックスと呼称される。

と言うか、俺は何故こんなにニーソについてモノローグで熱く語っているんだ……？

《女性を見るとき、大体足元から見てますから脚フェチなのは……？うわ、気持ち悪い。私の脚とか注視しないで下さいね。訴えますよ、ミッドデバイス保護団体に》

お前脚ないじゃん……

それに、何だよミッドデバイス保護団体って。

動物保護団体ならあるが、そのデバイスバージョンか？

と言うか、何自然にモノローグにツッコんでるんだよ？！

《あの方々は彼女の知り合いでしょうかね？》

ヴィヴィオの背後に居る、2人のお姉さんの事を指しているのだろう。

恐らく関係者なのだろうが……

そう思いつつも身体は正直なもので、反射的にリョウコへ手を伸ば

そうとしていた。

そして、そんな自分に少し嫌悪感を抱く。

「リオと涼さんは初対面だね？」

「うん」

「ああ……」

先程の疑問はヴィヴィオの一言で吹き飛んだ。
やはり、ヴィヴィオの知り合いらしい。

「はじめまして！去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりました。リオ・ウェズリーです！」

元気良いなあ……何より、屈託ない笑みが眩しいよ、本当に。

「はじめまして。中等科1年市ノ瀬涼です……」

一方根暗で、引きつった笑顔の俺。

額から汗が噴き出すのが分かる気がする……

ついでに胃の辺りがキリキリと痛み出した気もする。

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」

「その妹のウェンディっス♪」

ナカジマっていうと、父さんの知り合いでそんな名前の人が居たよ
うな気がするんだが……

気のせいだろうか？

「ウェンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私たちの先生なんですよ」

ヴィヴィオとコロナの師匠……つまり、彼女がストライクアーツの師匠ということか。

成る程、類は友を呼ぶ——美人は美人を呼ぶんだなあ、なんてどうでもいいことを思いつつ言葉に耳を傾けていた。

「よっ！お師匠様！」

ウェンディさんがからかう様に悪戯な笑みを浮かべてそう言った。

「コロナ、先生じゃねえっつの！」

ノーヴェさんは照れくさいのか、頬を微妙に赤くしていた。

まあ、悪い人達ではないようだ。

「先生だよねー？」

コロナの問いかけに

「教えてもらってるもん」

「先生って伺ってます！」

ヴィヴィオとリオはハキハキと答えると、ノーヴェさんがますます恥ずかしそうに頬を染めていた。
そんな様を見て思わず、頬が緩む。

「悪くないな」なんて事を思いつつ、目的地へと足を進める。

中央第4区 公民館

公民館と聞くと廃れた場所というイメージがあるかもしれないが、この世界においては、それは全く別物である。

様々な施設などがあり、地域住民たちの憩いの場となっている。

しかし……ストライクアーツの練習場が公民館にあるほど、需要があるんだな。

少しばかり過小評価していたというか、ぶっちゃけ馬鹿にしていたが……素直に考えを改めるとしよう。

壁に背中を預けて、利用者たちが身体を動かしている姿を眺める。

ヴィヴィオたちは運動用の衣類に着替えている。

女の子は運動着で外に出歩きたくはないよな……まあ、俺は最初からジャージなんだが。

「えらくサマになってるなあ」

目の前で型の練習なのかすら知らないが、身体を動かしている姿を見て思わずそんな台詞が漏れ出した。

「形にはなってるが、まだまだだな」

ノーヴェさんが腕組みしながらそう呟く。

「手厳しいですね、師匠さんは」

「お前までからかうのか……」

「それよりアレ、本来は魔法使わない練習ですよね？」

「気付いたのか……」

先程から一瞬、ほんの僅かだが瞬間的に魔力を感知できたのだ。

「どういうことっスか？」

「基本的な形にはなってるみたいですけど、たまーに無理な体勢から拳や蹴りを出したりするんで、反射的にごく僅かですが魔力を使

って補助してますよね？」

本人達にもきつと自覚がないくらいのレベルの些細な魔力量。魔力量の多い人間は、稀に無意識で魔力を放出してしまうことがある。

寝ているときだとか、感情が不安定になったときなど様々だが、その一種なのではないだろうか。

変換資質持ちとかだと特に大変らしいな。

電気持ちなら感電、停電に、家電全滅。

炎持ちなら火傷、火事。

年に何件かはこう言うのが原因で怪我人が出たりしている。

まあ、こういう人は総じて強力な魔導師になるからな。

局としては指導を行いつつ、同時に勧誘もしていたりもする。

「もしかして、何か心得でもあるのか？」

「まあ、少し齧った程度です。文句言うだけで、自分自身の実力なんて底の知れたものですが」

勿論それは真実で、精々何年か父や祖父に教わっただけのお遊戯と言っても差し支えのない程だ。

「ですが、修正するなら早めの方が良いですよ」

無理な体勢から強力な一撃を叩きこむってのは、身体にかなりの不可がかかる。

特に成長期の子供にはかなり危険だったりするから、魔力である程

度不可が軽減されるとはいえ、見過ごして良いものではないだろう。
ノーヴェさんも重々承知の上だろうが、ヴィヴィオ達のことを考えて一応釘を刺しておいた。

「これでもまともになった方なんだよ。アイツ等馬鹿みてえに魔力量保有してるから、無意識みたいなんだ」

「でしょうね。俺の何千倍あるんだか……」

「ありゃ、そんなに魔力量少ないんスか？」

「リョウコ、例のアレ出してくれ」

ジャージ姿では似合わない待機状態のリョウコに軽く指を触れる。

《了解です》

表示したパネルをノーヴェさんとウエンディさんに見せる。
つい先月受けた、魔力総量診断結果だ。

「……………」

「何桁か足りなくないスか？」

「……………」

「あの一、桁が……」

「ウエンディ、それ以上ヤツの傷に塩を塗るのは止めてやれ」

「どうせ、俺は魔力量ほぼ皆無ですよーだ」

地べたに座り込んで、床に「の」の字をひたすら書き続ける。

シヨックだ。

分かってはいても、他人から真正面から言われるのにはキツイものがある。

「桁が違うって言われたよ、リョウコ」

《はいはい、泣かないでください》

「泣いてなんか……ねえよ！」

《いや、ホントに泣き始めるのは止めて下さい。マジで対応に困りますよ》

「だって、桁が違うって言われたんだよね？」

《思春期男子の心をバツサリですね。単に折ったんじゃない、根元から折りやがりましたよね》

「悔しくなんかないんだからねッ!!」

「でも、この魔力量ってことは精密魔力探知なんて出来ないはずっスよね？」

ウェンディさんが不思議そうにそう言った。

「アレは感覚による感知なんで、魔力消費自体はゼロですよ。距離

が近いんで、それほど苦労しませんでした」

「僅かな魔力によく気付いたな」

「俺は魔力にちよいとばかり敏感な体質なもんで。身体が魔力を違和感として察知するんですよ」

「難儀な体質っスよね？それって」

「でも、これのお陰で色々助けられてることもあるので……それにあの娘達と会えたのも、この体質あってこそですから。悪い事ばかりでもないですよ」

視線をヴィヴィオたちに向ける。

「良い奴そうで安心したよ」

「あれ、俺って警戒されてたんですか？」

「そりゃあな。あの娘達より年上のしかも男で、こっち思いっきり警戒してたじゃねえか」

「警戒なんかしてましたっけ」

「首元のそれ、デバイスだろ。あたし等確認した瞬間、手を伸ばそうとしてたろ？」

「あー、やっぱバレてましたか」

隠し切れるとは思っていないし、そもそも警戒していると言う“意

思”を伝える事で牽制効果もあると踏んでいたが。かなり効果的だったらしい。

効果があり過ぎて、相手からも牽制される事になってしまったわけだが……

よくよく考えてみると、あんな街中で身構えなければならないような事件が起こる可能性なんて、かなり低いだろうに。浅墓だな、ホントに……

「インテリジェント型か？」

「一応はそうなんでしょうか。父さんが譲り受けた試作機なんです」

亡くなった父が、さる研究機関の技術者さんからタダで頂いたもの。曰く第4・5世代型であるらしいそれは、現行機より遥かに扱いにくい代物である。

一応第5世代型に設置予定だった機能は備わってはいるが……

「へえ、そういう機関の試作機って表には出さないもんじゃないのか？」

「第5世代型のための試作機って名目で開発されたんですが、開発コンセプト自体がお釈迦になっちゃったみたいですよ」

「現行機はたしか第4世代だろ？お釈迦になったって……それってつまり欠陥機ってことじゃないのか？」

「だからタダで譲ってくれたんでしょね。向こうだってある程度負い目があるから、定期メンテまでやってくれてるんでしょね」

「アフターケアまでばっちりとは至れり尽くせりじゃねえか」

「モノは考えようですね」

苦笑しながら、ノーヴェさんに同意する。

「ところで、涼ちゃん」

「その妙な呼び方を許可した覚えはありませんよ、ウエンディたん」

「ところで、あの中の誰とデキてるんスか？」

「このお姉さんスルーした揚句、何を言っているの?!」

俺の叫びが公民館内に響き渡った。

第4話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は前回（消去前）より＋4・84KB。

主人公の性格の悪さが、若干以前よりも増しているような気がしなくもない……

今回は回想で、シスターの出番がちょっと増えてたり、リョウコとの会話を追加したり、色々ですね。

三人娘が可愛く書けていれば良いのですが……

若干コロナさん成分が多かったかな？

私的にはコロナさんとアインハルトさんは耳年増キャラだと思っています。

えっちい単語とかを聞いて、二人がポカーン、二人が赤面——こんな状況を妄想していたりするの、きっと私だけ。

感想下さると嬉しいです。

では——

第5話

「んじゃあ、誰ともデキてないんスカ？」

さも付き合っているのが当然のように尋ねて来るウエンディさん。

「そんなわけないでしょう！」

「つまんないっスねー」

「年下の男をからかって楽しいんですか？」

「楽しいっス！何か興奮しますよね、ノーヴェ？」

「しねえっつの！」

ウエンディさんは俺の疑問に対して若干頬を赤らて答えてから、ノーヴェさんに同意を求めたが、同意は得られなかったらしい。年下をからかって楽しむのは、何も俺だけではないようだ。

「も、弄ばれた……」

《主の純情を弄んだ、責任はどうして頂けるんですか？》

竜驤虎視が初めて、俺以外の人物に聞こえるように言葉を発した。今までは念話で、俺にだけ話しかけていたわけだが。

まあ、特に注意する気もない。

普段から余り喋らせる機会がないだけに、こいつには申し訳ないと

思っている。

折角意志が与えられているというのに、普段あまり構ってやれてないし。

こういう機会でもなければ、俺以外と会話するなんてこともあるまい。

「おおう?! 喋ったっスよ!」

《失礼な。私は主の愛の奴隷、竜驤虎視。愛称はリョウコです。親しみをこめてリョウちゃんと呼ぶのです!》

「リョウコさん?! 奴隷なんて誤解を生む発言は止めて下さい! それから名前被るから、止めてえ!!」

無駄に機械音声っぽくない可愛らしい声で、「奴隷」という発言は俺の株を大幅に下落させるという恐ろしい能力を秘めている。このやり取りの前から十分ストップ安な気がするけれど……

「なんというか……個性的なデバイス、だな………」

「リョウコ……何でいつも人様と話するとき、そんな調子になるんだよ?」

《何度も注意してますけど、貴方はあの事件以来身を狙われる可能性だってあるんですよ? すぐに他人を信用するのはいつもの貴方らしくありません》

再び念話で、俺にだけ届くようにして発せられたその言葉が意味することは、俺への気遣いだった。

「すみません、少しトイレに行ってきます」

へらへらと作り笑顔を浮かべて、そそくさとその場を立ち去る。

「リョウコ、お前なあ……」

男子トイレに駆け込んで、誰も居ない事を確認してから、呆れた様に言った。

《貴方は楽観視しすぎなんですよ？》

一方、リョウコは随分と深刻そうな様子で、俺を諫めようとしているのが伝わって来た。

昔から、こういうところだけは変わってないよな……

相棒のそんな心遣いが、少しだけ嬉しかった。

当たり前なようで、そんな当たり前が幸せなんだ。

「別に俺は俺自身のことを1番、誰より知っているつもりだよ」

《分かっているのでしょう。主のアレはあらゆる魔導師に対する――
――》

「それも知ってる」

俺も持つ能力は、ちょっと変わり種と言うか、前例がないだけに色々扱いが面倒なのだ。

それはあの事件以降、何度も言われ続けて来た事だ。

自覚もしているし、実際に使う事に対して恐怖感もある。

だから、滅多な事がない限り使う事は避けて来た。

《でしたら、何故あのようなよく素性も知らぬような――！！》

「リョウコ、お前は神経質すぎるんだよ。それにな、俺はあの人たちは絶対信用できると思ってるんだよ」

《絶対、ですか……》

「ああ、絶対だ。ヴィヴィオの師匠とお友達ってだけで信じるに値するよ」

《何ですか？あの女のどこがそんなに良いんです？》

少し不機嫌そうな声が、トイレの中に響き渡る。

どう考えても論点がズレているぞ。

これじゃあまるで、俺が誰か女性をトイレに連れ込んでいるみたいじゃないか……

幸い誰も居なかったから、そんな勘違いされる心配もないんだけれど。

俺とリョウコが互いに念話すりゃあ、こうやって席を外す必要性もなかったような気もするな……

「惚れた女くらい信じるさ」

《は、はあ?! あ、あ、主? 惚れたとはあの、所謂一目惚れというヤツですか?! ちなみに言っておきますが、決してお米のブランドなどではないですよ! 》

いつもはもつと聞き取りやすい筈なのに、早口で所々呂律が回っていないような感じ。

「冗談だよ」

《冗談……? 》

「そ、半分くらいはね」

《半分くらいって、どういう意味です?! 》

勿論彼女には好意はある。

だが、それは恋愛とかそんな類のモノではない。

多分どちらかと言えば、保護欲とかその類に繋がっているんじゃないだろうか。

妙に可愛らしいし、ちっこいし、人懐っこいし。

「能力をあの娘達の前で使うつもりはないし、問題ないだろう?」

《どうして……そんなに彼女達に信頼を寄せているのですか? 》

「さあ、どうしてだかなあ……直感と言うか、本能的に、と言うか」

《ケダモノ…… 》

「そういう意味合いじゃないよ!？」

《ないと断言できるんですか?》

「それは出来んが……」

《ふん……もう知りません。好きになさって下さい》

拗ねたような可愛らしい声。

何だ、ちゃんとかういうところもあるんじゃないか。

「そう、か……」

《1つだけ言っておきますが、私は彼女達を信じたのではなく、主——貴方を信じたのですよ?》

「ああ、分かってる——ありがとな、相棒」

《分かっているのなら……良いです》

相棒と呼ばれて、少し照れ臭かったらしく、暫く大人しくなっ
てしまった。

下心が大半ってことはあまり知られたくない事実であるが、何とか有耶無耶に出来たぜ……

だって、男の子だもん。

自分の欲望には正直に生きたいよね、うん。

《やっぱり、ケダモノです……一体どこで教育を間違ってしまったのでしょうか………?》

バレテラッ?!

「あれ……? 何か人集まってるな」

トイレから戻ると、練習場の周りに謎の人ばかりが出来ていた。
何か楽しいイベントでも始まるのだろうか?

「遅かったけど、大きい方?」

「ウェンディさん、下品なこと言わないでください。ってか、何ですかこの人ばかり?」

「2人の組手、凄いからね。きっとびっくりするよ」

コロナがどこからともなく現れて解説をしてくれた。
その脇にはリオもいる。

「いつの間に大人モードになってたんだ……?」

いつぞや魔法練習場で見て以来の姿だった。

「いくよ、ノーヴェ」

「おうよ!」

緊張感がこの場を支配する。

この場にいる全員がそれを感じ取ったのか、水を打ったように静まる。

こういう場合、先に動くのかも重要なポイントだ。

場合によっては最初の一撃で決まってしまうこともある。

はたまた、最初の一撃に対してのカウンターが決定打になることもある。

両者のレベルが高ければ高いほど、一撃で決まる確率は高くなる。

長い、長い沈黙。

だが観客である俺は、固唾を飲んで見守る事しか出来ない。

呼吸音すら彼女達の戦いの妨げになるような気がして、思わず呼吸する事すら躊躇ってしまう。

それ程の緊迫感。

その動きの一挙手一投足を見ようと、目を見開いて観察する。

俺が目を閉じ、瞬きをした瞬間に、何かを叩くような音が二度聞こえた。

再び目を見開いた瞬間——瞳に映った映像を見て、驚愕した。

ノーヴェさんの姿。

充分にあった間合いを瞬く間に詰めていた。

だが、それだけではない。

地面に着いている脚は右脚一本で、左脚は地面から離れていた。

そう——

彼女は距離を詰めただけでなく、既に攻撃の体勢に入っていたのだ。あの音は地面を蹴った音か、踏み込んだ時の音だろう。

トレーニング施設で怪我防止のために、床は畳に良く似た軟らめの圧縮材を用いられているため、アスファルトなどとは違い、音が響き易いのだ。

ノーヴェさんの左脚が、綺麗な円を描くようにしてヴィヴィオに襲い掛かる。

だが、その蹴りの終着点を事前に読んでいたヴィヴィオは、右腕を顔の前に差し出していた。

ヴィヴィオは脚が腕とぶつかり合う瞬間に、僅かに肘と腰を動かし、力を受け流す。

非の打ちどころのない、完璧なガードだった。

だが間髪入れず、ノーヴェさんが右拳を叩き込む。

この拳の届く間合いを正確に読み取っていたらしく、ヴィヴィオは身体を反らす事で回避する。

それも最小の動き——紙一重で躲したのだ。

そして、ヴィヴィオの回避方法は次の攻撃の為の布石でもあった。

その体勢を戻す反動を利用して、左ストレートをそのまま——突き出した。

防戦一方のように思えた展開であったが、ノーヴェさんが次の一手を投じるよりも前に、攻撃に転じたのだ。

だが——

ノーヴェさんは、まるで最初から分かっていたかのように——ここでカウンターが来る事を予知していたかのように、既に左腕はガードの構えを取っていた。

それだけでは確実に防ぎきれないと察したのか、左腕の上に、突き出していた右腕を引き寄せて、十字に重ねる。

両腕のガード——クロスアームガードの体勢に入っていた。

あの右拳を叩きこんだ後、攻撃するつもりだったのなら、両腕をガードに回すような余裕はなかった筈だ。

最初から、クロスアームでガードするつもりだったとは思えない動き。

仮に、そうでなかったとしても、その判断力は流石の一言に尽きる。こういう自分が優勢に立っている状況では、ついつい目の前の“勝ち”を取り急いでしまう。

だが、ノーヴェさんは違った。

相手の実力を鑑みた上で、この場は一端受けに回るべきと判断したのだ。

だが、彼女を評価するにはまだ早い。

次の攻撃がすぐそこに迫って来ているのだから――

ヴィヴィオは左拳叩き込んだ勢いで少し前のめりになってしまっていたが、そのままその体勢を利用して、右脚を軸にして左脚の回し蹴りを叩き込んだ。

崩れた体勢を逆に利用して、攻撃のために使ったってわけか……残念ながら、ノーヴェさんは軽い身のこなしでその回し蹴りを躲した。

回し蹴りの後……ちょっと隙があるように見えるが………？
気のせいか……俺程度に気付ける筈もないよな。

しかし……とんでもないモノを見ちゃったなあ。

両者とも涼しい顔をして、こんな事をやってのけたのだ。
背筋に震えが走った。

「ふたりともやるもんっスなあ」

「はい！」

「……にしてもヴィヴィオ身体、柔らかえな……あの上体反らし、俺なら腰傷めるって」

あまりの出来事に一瞬言葉を失っていたが、何とか言葉を紡ぎ出す事に成功した。

そして、2人の戦いを見て冷え切っていた身体が、徐々に熱を取り戻し始めていた。

どくんどくん、とやけに五月蠅く感じる心臓の鼓動。

血流が分かる気がする。

熱が心臓から全身に広がって行く感覚。

相変わらず鼓動は五月蠅いままで、何故か気分が高揚してくるのが分かった。

そして、気付けばニヤリと笑みを浮かべていた。

全く持って気持ちの悪い所業だ。

「先輩、年寄り臭いですよ……」

「お黙り——ってライ〇ーキックだよ、かけえ!!」

ヴィヴィオの飛び蹴りとノーヴェさんの回し蹴りが激突していた。あの飛び蹴りの姿はどう見ても、幼い頃に憧れた有名ヒーローの必殺技だ。

「今みたいに軽くやってみるか？ スッキリするぞ」

軽い組手が終わったらしく、ノーヴェさんが涼しい顔でこちらに戻って来た。

あれで軽いつて……激しくなるとどうなるのさ？
想像しただけで恐ろしいぞ……

ヴィヴィオはまだ型の確認なのだろうか、左拳を虚空へと突き出している。

その後、回し蹴りを放つ。

動作を確かめるように、ゆっくりとした動きだ。

蹴りを打ち込んだ後には、軽く後ろに跳ぶ。

先程ノーヴェさんに見事に制されたコンビネーションか。

向上思考が凄まじいな……俺には到底真似できそうもない。

だが、軽く後ろに跳ぶのは“仕切り直し”としての意味合いがあるのか、俺が考えた通り“隙があるから”なのか……

この辺は実際にやり合ってみないと分からんだろうな。

しかし、あれだけ動いて汗1つかいていない様子を見ると彼女たちの実力は一体――？

「いえ、流石にあのレベルを見せつけられると……」

正直やり辛かったらありやしない。

周りの見学者さんからすれば、連れの俺も同じレベルだと思われる
いるわけで……

何と言うか、期待の眼差しっていうのかな？それが突き刺さるんだよ。

当然あんなレベルの芸当は出来ない、そう言いきれる。

あんなのとまともに渡り合える筈がない。

「ちょっとヴィヴィオ、相手してやれよ」

「良いですよー」

軽くオーケーしよったで、この娘……

「ストレス解消に良いんじゃないスカ？」

「俺、ストレスなんてないんで結構ですよ?!」

「大丈夫ですよ、本気でやるわけじゃないですからー」

「一応何かしらの心得あるんなら、大丈夫だろ？」

「いや……細かいルールも知りませんし」

何この流れ……？

嫌な予感しかない。

やっぱ、今日ここに來た事は、何かの間違いだったんじゃないか？

「簡単。魔力強化のみの打撃によるダメージを与える競技だ」

「柔道や剣道みたいに1本で勝負ありみたいなことないんですねえ……」

あの手の一瞬の油断が敗因に繋がる競技なら、まだ可能性があるんだが。

この競技はラッキーパンチ1発で倒れてくれるほど楽なものでもないだろう。

ま、柔道や剣道が楽に勝てる競技ってワケでもないけどさ。

結局は一番才能があるやつか、努力したやつが勝利するのが普通だろうさ。

「じゃあノックダウン制にするか？」

「それなら、すぐに倒れて逃げれますし……途中ヤバかったら助けて下さいよ？」

《男の子なら耐えなさい》

「はい……」

リョウコの一喝で渋々参加することになった。

さっきは俺のことを心配していたくせに、参加を促すってのはどう
いうわけだ……？

ちよっと、からかったのがマズかったのだろうか？

と言うわけで、ヴィヴィオと組手を行うことになった。

大人モードで、手と足の長さは向こうが上。
つまり、リーチはあちらの方が上って事だ。

加えて、魔力総量とあの変身魔法の性能も鑑みて、パワー、スピー
ド共に相手の方が上であろう。

敗戦濃厚……ま、そこが俺の定位置だ。

何を今更恥じる事があるうか――

いや、ちよっと訂正。

この観衆の中で惨めに負けるのは、ちよっと恥ずかしいです……

結局、俺が敵いそうなものは精々反射神経だろうな。

アレばかりは魔力による底上げも難しい。

まあ、難しいだけで実現不可能ってわけじゃないんだが……

ルールのにはまだ可能性がないわけでもない。
今回は特別にスリーノックダウン制を採用している。
名称の通り、3度倒れると負けだ。

ノーヴェさん、わざわざ俺にも多少可能性のある方法を提案してくれたようだな。

もっとも、俺の戦い方じゃあストレス解消とは程遠いだろうけど。
力負け必至なのに、わざわざ真正面から突っ込むってのは自殺行為だ。

よって、相手の油断を誘っておいてのカウンター——この一択しかあるまいよ。

「じゃ、準備良いか？」

「はい！」

身体強化魔法を発動させる。

何度か手を開いたり、閉じたりを繰り返し効果が反映されたかを確認する。

「大丈夫です」

力強く一言、そう呟き眼前の“敵”を見据える。

金色の髪にオッドアイ、恵まれた魔力資質と、訓練環境、そして何よりあの“高町なのは”さんの娘……

対する俺は、魔力資質皆無に指導者も皆無。

勝てる道理などない。

でも……

だからこそ——挑む価値がある！

負けることなど承知の上だ。

大切なのはそこから何を得るか、だ。

こんな事自分に言い聞かせたところで、負けを正当化しているだけか……

「はじめ！」

余計な事を考えるのは後回しにしよう。
今は、こっちに集中だ。

拳を握り、ゆったりと構える。

先程の組手と同じく、互いに動かない。

いや、俺の場合動けないんだが……

先程も言ったように、非力な俺から突っ込むのは自殺行為。
基本カウンター狙いのつもりだ。
だが、こう手をこまねいては俺の魔力が底を尽きちまう。

魔力を全部使い切るつもりで強化して、もって15分。

俺は少ない魔力を扱う分には魔力効率が良い方なのだが、一定量の魔力を超えると急に魔力効率が下がっちまう。

魔力の特質というか、リンカーコアの特質だな。

だから、この15分強化が一番効率が良いのだ。

ちなみに魔力効率って言うのは、消費した魔力量に対して実際に仕事をした力の割合を示す。

仕事率なんて呼び方もある。

呑気に脳内で語っているのにも関わらず、ヴィヴィオはまだ動かない。

まだか……？

落ち着け、焦りは敗因に繋がる。

「……………」

「……………」

しかし、動かない。

この間合いなら、動いてきた相手にカウンターを合わせるのにもそんなに苦勞しそうに――

“ない”と心中で呟く前に、ダンッ――と地面を蹴る音と共に、5メートル余りの間合いを一気に詰められる。

速えッ!!

咄嗟に後ろに軽く飛び、両腕をガードに回す。

「はあああ!!」

彼女の拳とガードしている腕とぶつかる直前に、僅かに後ろに跳んで威力を殺す。

「――ッ!!」

だがぶつかり合った直後、激しい衝撃が腕から足先、頭の先まで駆け巡る。

まるで雷にでも撃たれたかのような、そんな錯覚を覚える程の衝撃。地に足が着いていない事に気づいたのはその直後だった。

ドタンと尻もちを付いた俺は、ただただ惨めだったろう。

だが、おもしれえ……実戦的っていうのか？
こういう健全な実戦ってのは初めてだからな。
勝てればさぞ気持ちいいだろう。

それが汚い勝ち方であれば、あるほど、な……

状況的には圧倒的に不利な筈が、自然と笑みがこぼれてくる。

《——》

一瞬、リョウコのクスリと笑う声が聞こえたような気がした。
わざわざ戦うように促したのは、俺がどこかでこういうのを望んで
たつてのを察して、か……

確かに、ノーヴェさんとヴィヴィオの戦う姿を見ていたら、こう身
体を動かしたくなったと言うか、じっとして居られないと言うか……
……こういう感情は初めてだから、どう表現して良いのか分からんな。

それでも、悪い気はしねえって事だけは確かだ。

「だ、大丈夫ですか?!」

「ああ、平気だ」

ヴィヴィオが尻もちを付いた俺の方にやって来て、「すみません、
ちょっと急でしたよね。ごめんなさい!」なんて言いつつ、ペコペ
コと何度も頭を下げる。

優しいな……リョウコ、やっぱ俺の見立ては間違っちゃいなかったろう？

先程のトイレでの一件を思い出して、心の中でリョウコに呟いた。伝わっているかなんて分からない。

それでも、アイツもちょっとは刺々しい態度を改めてくれることだろう。

《先程ヴィヴィオさんの服から、チラチラと見えていたお臍を注視していました！！ケダモノです、変態です、不潔です、不純です！それから不相応です！》

俺に対する態度も色んな意味で改まりそうだ……それに最後の不相応って……色々と酷くないか？

「後2回で負けだぞ。さ、構えて」

ノーヴェさんに促されたので、拳を構え、どうしたものかと考える。

パワー負けは予想していたが、ここまでとはな……

まともに撃ち合って勝てる筈がない。予想は的中。

実は少しだけではあるが、その予想が外れることを期待していたんだが……見事に撃ち壊してくれやがった。

相手は過大評価するくらいが丁度良い——って教えはマジみたいだな……

ゆっくりと両腕をクロスさせて、ガードの体勢を最初から取る。

一瞬辺りが騒がしくなった気がする。

ま、みつともない姿だろうしな。

でも現状じゃあこれがベストだ。

一撃でもまともにもらっちゃあ終わりだ。

ダウン数以前にアレを受けたら、完全に意識を持っていかれちまう。

「はじめ！」

今度は合図と同時にヴィヴィオが飛び出してくる。

こちらが防御の構えを取っている以上、攻めて来ることはないと判断したのだろう。

今度は鋭い蹴りがこちらの脇腹えぐを抉ろうと迫って来る。

「後ろに下がって駄目なら——！！」

今度は逆に前に出る。

脚が伸びきる前に、自ら当たりに行く事で威力を抑えるという考えだ。

バシーンーと生々しい音と共に、再び電流のようなものが腕から全身に走った。

痛みだ。

だが、そう判断した瞬間には、それがなくなっていた。後退と違って、まともに受け切っちゃまったのが仇となってしまったらしい。

ダメージか、ダウンか……この二択ってわけか……………

「――両腕使ってガードしてコレかよ……」

感覚を奪われた両腕と、後ろに倒れそうになっていた自分の体勢。これじゃあ何発もガードしきれん……回避に専念して、両腕の感覚が戻るのを待つべきか？

「次行きます!!」

思考させまい、とヴィヴィオの猛攻は続く。
今度は左ストレート。

恐らく、これは四で次の一撃――回し蹴りが勝負手だろう。
後ろに回避したところに、拳よりもリーチが長い蹴りの間合い内だ。

加えて、痺れた腕でガードしきれるとも思えん……

そうと予想しつつも、左ストレートを大げさなほど距離を取って回避する。

美脚がこちらに向かって飛ぶ――

だが、ある程度は予測できていた。
だから――

その脚を払った。

ドタン――可愛らしく尻もちを付くヴィヴィオ。
自分の身に何が起こったか分からないような、そんな表情。

「悪いな。左ストレートの後の蹴りはさっきの組手とかで、何度か見せてもらったからな」

口では余裕ぶっけていても、内心はかなりヒヤヒヤしている。
上手くいく保証なんてなかった。

だって、今のは俺の出身世界の中学生が柔道で習うようなものだぜ
……？

やっぱり、どんなに変則的な技よりも、実戦で役に立つのはこういう基礎技なのかもしれない。

「今のは――」

「出足払い。初歩中の初歩だぜ？」

煽るだけ煽ってみる。

これでペースを崩せたんなら儲けもんだ。

だがどうする？

さっきのは次の手が分かってたから対応できたものの、攻撃パターンを変えられちゃあ対応のしようがない。

厳密に言えば、確実に蹴りが来るとは思っていないなかった。

確かに確率は高かったかもしれない、だが高くても100%じゃない。

今のは運が良かった。

運にすぎるより他に手がなかったのは、力量差故だ。

動きが速くて、動いたのを確認してからでは間に合わん……

それに回避にしても、精度自体は最悪。

これに対しても手を考えねばなるまい。

そういや、爺ちゃんから習ったアレって使える……か？

仕組み自体は同じだし、多分いける筈……

だが、それはタイミングが命だ。

それもまたさっきみたいに運任せにするか……？

運任せにするって言っても、大まかなタイミングが全く読めなくちゃ話に――

いや……ちょっと待て。

成程……その手があったかッ！

こいつを使えば、大凡のタイミング合わせは出来る！

まあ、そこから先は例によって運任せなんだがな。

闇雲にやるよりはずっと良い。

1%でも勝機があるって言うんなら、諦める道理はねえよな……！

「構え」

いつの間にか起き上がったヴィヴィオを前に、ある策を講じるべく頭の中でイメージを描く。

「はじめ！」

ダウンの数は1対1。

第5話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は＋7・90KB

倍近く増えてます。

よもや説明回である第2話を超えるとは……

自分で書いてて予想外。

リョウコの気遣う場面や拗ねてるところを追加。主人公のデバイスなので、それなりの出番と人気獲得をしなくては……

それから、戦闘シーンの描写追加。

漫画にして数コマに満たないシーンで、それなりに頑張ってみました。

主人公の動きと比べて、原作キャラクターの凄さが伝わるように色々試行錯誤しました。

踏み込みが見切れないのに、細かい動きが見えているのは、致し方ないと言いますか……

何も見えなかった、で終わるよりは、こうして書いた方が凄さが伝わると思いましたし、味気なさすぎると判断してこうなりました。

説明中はこの間僅か0・1秒とか、そんな感じです。

次回も修正箇所がやたらあるので、更新が遅れるかもしれません。この点、ご了承下さい。

感想下さると嬉しいです。

では——

第6話（前書き）

遅れましたが、第6話です

第6話

ストライクアーツのスリーノックダウン制での組手。

対するは高町なのはの娘——高町ヴィヴィオ。

先制されてしまったものの、何とか喰らいついて1対1にまで持ち込んだ。

魔力総量、パワー、スピード、いずれもこちらが下回る。

こんな状況下において、先程の出足払いが決まったのは偶然や奇跡の類だ。

起死回生の一手、と言うには少々大袈裟かもしれないが、なんとか首の皮一枚繋がった。

だが、彼女は同じ轍は踏まないタイプだろう。

あちらは恐らく、あのコンビネーションは繰り出してこないだろう。それでもって、出足払いに対する警戒もしている。

よって、同じ手でダウンを取るのはかなり難しい。

初見、一度きりの手——そんな事は分かっていた。

だが、出足払いの警戒のために、こちらの脚にある程度意識が行っ

ちまう筈……

それを逆手にとって、拳を叩きこむか……？

いや……それじゃ、駄目だ。

思い上がるなよ、俺は非力なんだ。

俺の拳如きでダウンを取れる筈がない。

落ち着いて状況を把握し、出来る事をしろ……

全ての思考を一端停止させて、大きく深呼吸。

取り入れた空気が、身体の熱を外へ逃がしてくれたような気がした。

そして、少しはまともな思考が出来るくらいには頭を冷やす事が出来た。

先んじて手を出す事は、考慮していなかった筈だろう。

それが功を奏してダウンを取れた。

故にその戦法を崩す必要はない。

寧ろ、上手くいったのだから、そのまま突き進むべきだ。

こちらから攻撃を仕掛けたところで、躲されるのがオチだ……

その一撃にカウンターを叩きこまれる、という結末まで容易に想像できる。

多分、ダウンを取れて嬉しかったんだと思う。

あんな馬鹿げたような動きをする相手から、偶然であったとしてもダウンが取れた。

その事実は何よりも嬉しくて、もっと自分の力を試してみたい——そんな感情が生まれてしまった。

らしくない……か。

少しは変わっただろうか？

あの頃から——

《ボーっとしてないで、前を見据えて下さい》

そんなリョウコの声で、現実に取り戻される。

「そうだったな……今は——目の前の事に集中しよう！関係のない考え事は、こいつが終わってからだ」

相手の動きが速くて見切れない。

動きの速度が尋常じゃない。

動いたのを確認してからじゃ間に合わない。

気付いたら既に相手の間合い。

辛うじてガードは出来たが、相手の一撃一撃が重く、こちらに対して必殺級の破壊力を持っている。

先程ガードした際の、腕の痺れ——それが証明してくれている。

そういや、爺ちゃんから習ったアレって使える……か？

祖父から教えてもらった、ある技術が脳裏をよぎった。

仕組み自体は同じだし、多分いける筈……なんだけど。

問題は、俺が相手の動きに付いていけないってことだ。

相手の動きに付いていけなくちゃ、繰り出すタイミングを合わせられない。

特にタイミングが鍵となるこの技術においては、かなり重要な問題だ。

どうにか、タイミングを合わせる術がないのか……？

いや……待て。

成程……その手があったかッ！
こいつを使えば、大凡のタイミング合わせは出来る！

今回限りの応用の利かない手ではあるが、今はそれでも充分だ。
寧ろ、その方が俺らしくて良いじゃねえか。

「はじめ！」

審判役であるノーヴェさんが試合再開の合図を行う。

先程までのように視線を身体全体でなく、爪先と腕の動きに集中する。

身体が動いた後で間に合わないんだったら、初動である程度のタイミングを読む。

爪先が少し動く。

この間合いじゃ蹴りってことはない。

なら、距離を詰めるためか——！

思い切り後退して距離を取ろうとするが、それよりも速く彼女が突っ込んで来る。

だが、ある地点でピタリと動きを止めた。

俺の脚の届く範囲——俺の蹴りの間合いだ。
成る程、どうやら警戒してたみたいだな……

さっきの一撃は決して無駄なんかじゃなかった——！

今までの彼女ならば迷わず突っ込んで来るところを、あえて脚を止めて警戒したんだ。

いや……それでもペースが崩れたと判断するにはまだ早い。
寧ろ慎重な対応と言えよう。

彼女の些細な行動を見て喜々としていた自分を少しだけ諫めて、相手を見据える。

あの程度では崩せん、か……

そりゃあ、あの人の——高町なのはの娘なら、このくらいじゃ駄目だろうよ！

このまま攻撃に持ち込まれたら、たまったもんじゃない。
一度体勢を立て直すか、仕切り直したいところだな……

だったら、仕切り直しだ——

バックステップで後退して距離を取ろうとするが、それを確認して
ヴィヴィオの爪先が地面を蹴る。

どうやら安全圏まで、退避はさせてもらえないようだ。

後退する脚を止めて、牽制目的で再び出足払いを放つ。
ヴィヴィオはそれを読んでいたかのように、素早く脚を引き戻し、
その脚を軸足として蹴りを放つ。

今度はこっちに出足払い——！？

完全にしてやられた！

急いで脚を引っ込めるが、体勢が崩れかける。

しまった――！？

この隙を彼女が見逃す筈がない。

いや――元より、こちらが本命か。

最初の払いで倒すつもりなど、毛頭なかったのだろう。

ヴィヴィオは払うために出した脚を使い、そのまま大きく一歩踏み込んで来たのだ。

この間合いは蹴りじゃない！

加えて、脚先は地面に付いたまま――

「――ッ」

脚の動きに気を取られて、腕の動きをろくに見ていなかった――！！

彼女の右拳が迫るのが、スローモーションのように感じられた。

このタイミングじゃ、ギリギリ躲したところで蹴りの間合い内だ。今よりも崩れた体勢で、蹴りを受け切れる筈がない。

だったら――

俺は崩れた体勢のまま、思い切り地面を蹴って跳んだ。少し浮遊感を味わった後、重力によって地面に叩きつけられる。

あの体勢のまま跳んだのだから、当然と言えば当然なのだが。

「――ッ！」

受け身も何もあったもんじゃない。

肘が腹の辺りにぶつかり、表情を歪めるが、あの拳の直撃よりはずっとマシな筈だ。

拳が直撃しなかったにも関わらず、拳が風を切る音に思わずヒヤリとさせられた。

倒れ伏せたまま、その拳の放った当人を見据える。目が合った瞬間に、思わず身体が固まった。

真っ直ぐに俺の事だけを見据え、一切揺らがない。
表情は組手中だと言うのに、眩しいくらいの笑顔で、まるで楽しんでるかのようだった。

そんな表情を見て、ちょこっとだけドキツとした。

いや、だって……女の子とこんなに見つめ合う事なんて、滅多にないじゃないか。

見つめ合うって言うには、少々物騒かもしれないけどさ……

そんな事をしみじみと思った瞬間、彼女が踏み込んで来るのが分かった。

おいおい、そいつはシャレにならんぞツ？！

「待て！」

予想通り、ノーヴェさんの声が響いた。

いや……声がかかるのは予想通りだったんだが、ヴィヴィオが突っ込んで来るところは想定外だ。

《顔色が酷い事になってますよ？今更ながらですが、主って、こういう想定外の出来事にはとおっても弱いですよねえ》

ヴィヴィオと同じようにえらく楽しそうな様子が、声からも伝わって来る。

こやつは何故、俺のピンチで喜んでるんだよ……？

しかし、想定外に弱い……か。

確かに、そういう傾向があるのかもしれない。

こういうのは性分の問題だから、直そうにもそう簡単にはいかないもんさ。

「そこ、もう場外だからな。一度目は見逃すが、二度目はないと思えよ？」

少し、苦笑しながらそう忠告するノーヴェさん。

わざと、場外へ逃げたからな。

場外に向かって大きく後退して回避すれば、回避と同時にリングアウツで仕切り直し。

スポーツマンシップに反する行為であり、俺の得意分野。

こういう小技でも使わないと、まともにやりあえない……

自身の行為を正当化するつもりなどはない。

卑怯だと言う事は分かっている。

だからこそ、使うんだ。

基本的に、相手と同じ土俵で勝負するつもりはない。

するとしても、相手をこちら側に引き込んでの、泥試合だ。

「はい、以後気を付けます」

二度目はない、か……

一度目を認めてくれるだけ、ありがたいもんさ。

所定の位置に戻り、再び構える。

右拳を握り込み、再びヴィヴィオの足元に視線を移す。

全ての神経を集中させる。

相手の脚が地面から離れた後の、最初の変化に気付かないと……

そうしなくちゃ、負ける……

「はじめ——！」

再開、その号令と共に地面を蹴る音が響いた。

その音を聞いて、素早く右拳を大きく振り上げる。

そして、その音からほんの一息の後、もう一度音が聞こえた。
俺は素早く二歩後退し、そして——

右拳を眼前に振り下ろした。

拳に何かが衝突した衝撃が身体を駆け巡るが、そのまま構わずに振り切る。

「――?!」

一撃をいなされて、口を開け驚いた様子のヴィヴィオが居た。

そんな表情がどうにも心地良く感じる。

しばらくして彼女の口は閉じ、横に伸び、驚愕から笑みへと変わっていた。

今のは祖父から習った、“切っ先落とし”という技術だ。

相手が腕を伸ばし切るより前に、自分の獲物――今回の場合は拳を振り下ろし、威力が最大になる前に制する技術。

打ち下ろしと薙ぎ払いの2パターンがあるが、ようは弱い力でも攻撃をいなすことができるのだ。

強い力に対して、正面からぶつかったのでは衝撃は全てこちらに向かって来ることになる。

これは打点をずらして力を逃がすので、少ない力でも相手の攻撃を無力化できるという、何とも俺向きな技術だ。

繰り返すタイミングが結構シビアで、成功したのは“音”のお陰だ。相手が動く初動の踏み込みの音、そして二度目は攻撃の際の踏み込みの音。

何度か彼女の攻撃を見てきたが、競技として仕切られたコート内ならば、彼女は僅か一歩で踏み込んで来る。

素早く移動するには、歩幅を狭くして脚の回転を速くするか、歩幅を大きくして跳ぶように動くかの二択になる。

長距離馬拉ソンで言うところの、ピッチ走行とスライド走行だな。

彼女の場合、後者のスタイルだ。

音が二度しかなかったのだから、勝手にそう判断した。

もっとも、俺の耳で捕らえられた音が二回だけで、実際にはもっと多かったのかもしれない。

ま、結果的に上手く行ったから良いよな？

とは言っても、“切っ先落とし”にはタイミングの他にもう1つ、大きな欠点があるわけで。

それを悟られる前に勝負を付けないと……マズいな。

「ふうー」

一息吐いてから、先程と同じように右拳を大きく振り上げる。
距離は互いの間合い内だ。
どちらの攻撃も届く範囲内。

彼女の小さく開かれた口からは、浅い呼吸を繰り返している事が見て取れた。

超近距離で、彼女の息遣いすらも聞こえてくるような気がした。
些細な仕草に、思わずどぎまぎさせられてしまった。

大人モードなので、何と言いますか……目の向けどころに困る。
特に胸の辺りとか……

そんな思春期特有の感情を押し殺して、彼女の脚と腕が視界に入るように少しだけ上体を反らして、構える。

これだけ距離が近いと対応は難しい上に、後退する暇も与えてもらえないだろう。

いなした後、気を抜かずに間合いを取っていれば……こんな事態にはならなかった。

思わず、握る拳に力がこもる。

爪が皮膚に喰い込み痛みを発生させるが、これは自分に対する罰としては丁度良いだろう、と割り切る事にした。

ヴィヴィオの重心が右脚に移る――

ならば、来るのは左脚だ！

その予想通り、風を切る音と同時に、左脚が迫って来る。
半歩後退して、腕をその脚に叩きつけるように振り下ろす。

振り下ろした後、彼女は少し体勢が前屈み気味になっていた。
今、彼女には攻撃出来る術がない――！

だったら――！！

カウンターで、蹴りのお返しと左拳を突き出す。
狙いは顔面――女の子の、それも顔に拳を向けるのは少々気が引けるが、どうせ当たらないだろう。

案の定、彼女は一気に上体を反らして、紙一重で回避する。
ノーヴェさんとの組手で見た光景を脳裏で思い浮かべつつ、自分の取るべき行動をイメージする。

勝負はここだ――！

上体を戻した勢いで拳――

これを放つ瞬間こそが、俺が付け入ることの出来る唯一の弱点。

仰け反った体勢から繰り出すパンチ。

確かに攻守の切り替えとしては有用な手であろう。

だが、今の彼女ならば付け入る隙はある。

彼女が練習する姿を見て最初に覚えた違和感――

それは、魔力による姿勢保持だ。

本来魔力を使わない型の練習で、彼女はそれを使った。

それを――魔力を使わなければ、体勢が崩れる事を意味している。

そしてそれは――

魔力で無理矢理体勢を保っている事を意味している。

そしてその体勢の脚を、魔力強化した脚を持ってして蹴り払えばどうなるか？

魔力値の低い人間で、武術の素人で、馬鹿で、浅墓で、臆病者で、無能な人間の蹴りであろうが――
不安定な体勢の脚を蹴り払われれば――

ボタン――

再び尻もちを付く、ヴィヴィオ。

「今のって……」

「無理な体勢からの攻撃ってのは、確かに有効かもしれない。だが身体を傷める危険性に加え、こういう問題点だってあるんだぞ？」

あくまで余裕綽々の態度で接する。

冷や汗を流しつつ言う台詞ではないが、精神面だけでも優位に立っておきたい。

運動量に似合わぬ汗の量で、額から頬にかけて流れていくのを感じる。

これでバレたりはしないだろうか？

表情は上手く隠せているだろうか？

心配事ばかりが頭に浮かんでくるが、今は演じるしかない。

焦りは失敗を生む。

そこに懸けるより他あるまい。

俺の繰り出す手なんて、殆どは初見相手にのみ有効なものだ、というのは何度か触れた事だろう。
だからこそ、繰り出すタイミングがミソなのだ。

まあ、焦っているのは俺の方かもしれないが……

2 対 1

次に俺がヴィヴィオを倒したら、一応は勝ちになるわけだが……

さつきから、ヴィヴィオの目が結構マジになって来てるのが普通に怖い。

俺が場外へ出た筈なのに、突っ込んで来たし……
あの行為が故意に行われていたのだとしたら……あちらさんの思惑
通りなんだろうな。

十分すぎる脅しになっているのだから。

いやいや、負けるな。

ビビってたら、こっちが負ける。

ペースだけは今のところこっちが握ってるんだ。

本当にペースだけ、なんだけどな。

だが、そう思い込ませるところまでが相手の戦略だったとしたら？
俺は彼女の掌の上で踊らされている事になる……
そうだとすれば――

「……そいつは考えすぎだと、思いたい………」

《思考を止めるのは愚か者のやる事です、行き過ぎも考えもので
すよ？》

「……分かってるよ」

とは口で言いつつも、心中では気になって仕方がない。
リョウコの気遣いに感謝しつつも、握りしめた拳の震えは止まらな
い。

冷静に、冷静に……

やたらと騒いでいる心音を落ち着けるように、心の中でそう何度も言い聞かせる。

だが、早急にそういった懸念が消え去ることはない。

拭い去ろうとしても、最悪の状況に陥ったビジョンばかりが脳裏に浮かんで来る。

胃の辺りからキリキリと走る痛みに、改めて自身の弱さを実感させられる。

肉体的にも精神的にも弱い。

まったく……こいつあ、ひでえや。

あまりの自分の非力さに、思わず自虐的な笑みを浮かべた。

神経を研ぎ澄ませて、相手の微かな動きすらも見逃さないように、と自分に言い聞かせる。

先程と同じ要領で行えば、一撃、二撃目までは切っ先落として何とか対応できる……筈だ。

「はじめ！」

ヴィヴィオが再び強襲。

だが――踏み込みのタイミングは、大凡掴んだぞ！

最初の踏み込みの音を聞いて、大きく右に身体を移動させる。

俺の身体の脇を、彼女の左ストレートが通過していった。
挨拶代わりという感じの軽い左ストレートだった。

次に来たのは右の拳。

回避は難しいので、切っ先落として叩き落とす。

少し前傾姿勢になった俺の元へ、右脚が床から浮いている様子が目に飛び込んできた。

さっきの右拳の踏み込んだ左脚を軸足として、そこからの蹴り。

そう予想し、咄嗟にガードの構えを取るが――

ヴィヴィオはその脚を戻した。

「しまっ——」

しまった、と言うより先に飛び込んでくるのは彼女の左ストレート。

ガードを拳の方向に修正する。

ガードを左でこじ開けられ、ガラガラに空いた身体に右拳が叩き込まれた。

「があ……痛ッてえ！」

一瞬息が詰まる。

頭がクラクラしていて、平衡感覚も失われているらしい。

床に叩きつけられ、再び痛みに表情を歪める羽目になってしまった。

咄嗟に後ろに飛んでなかったら……一体どうなっていたのだろうか？

そして何より言いたい事が1点だけある。

「痛え……手を抜くって言ったじゃんッ！」

嘘吐きい。

今明らかに手を抜くという行為に対して、手を抜いたよね？！

《いや、十分手は抜いてもらってますよ……？》

「……分かってるよ。んな事くらい」

尻もちとか言うレベルじゃなく、完全にダウンだ。

天井が見える。

敗北者しか見られない光景、だろうな……

「大丈夫か？一応後ろに飛んでたように見えたけど……」

ノーヴェさんが俺の顔を覗き込む。

「大丈夫ですよ」

「よっこらせ」と爺臭い台詞を言って起き上がる。

鳩尾のあたりに鈍い痛みが走るが、動けない程じゃない。

別に痛みが快楽に変わるとかいう性癖はない筈なのだが、妙に心地よく感じる。

楽しいな。

こういうのも悪くない、かな……？

2対2、か……

もう一度、彼女の体勢を崩しにかかるって手しか思い浮かばない。

ダウン数的には互角のように見えるかもしれないが、リョウコの言う通り、ヴィヴィオはある程度手を抜いてコレだ。身体強化に使う魔力量など、先程のノーヴェさんとの組手で使用した量の半分以下。

つまり、破壊力などもその分下がっているわけで。

それでもこのザマだ……

「はじめ！」

組手開始時と同様、互いに動かない。

あの子の癖を利用する……妙に嫌な予感がするが、それ以外に手は浮かばん。

癖なんて早々簡単に修正できる筈がないのだから――

「……………」

「……………」

蹴りがまず飛んでくるので、切っ先落として対応。続けての左拳は俺の顔面を狙っていた。

顔を傾けてなんとか回避に成功する。

少し頬を掠って、耳はゴォつと風を切る凄まじい音が聞こえる。

一瞬鳥肌が立ったが、これはチャンスとこちらから右拳を繰り出す。

だが、彼女は上体を反らして回避する。

待っていた――この瞬間を！

2回目のダウンを取ったときと同じ状況――

これなら――！！

先程と同じように脚を払おうとするが。

払えない――？

体勢が崩れていない……？！

まさか、これは？！

「罨かッ？！」

気付いた時には既に手遅れ、こちらが出している脚とは反対の脚――つまり軸脚をすくわれる形となった。

当然体勢を崩される。

ドタン――

虚しく俺が倒れる音が室内に響き渡る。

勝負がついた瞬間だった。

どこか冷たく感じる床からは、敗北感

組手は当初の予想を裏切ることなく、俺の敗北で終わったわけだ。思ったより善戦できたのは、ヴィヴィオがある程度手を抜いていたお陰であり、本気なら1回ダウン取れていれば良い方だ。

「ふうー、はあー」

大きく深呼吸。

重い腰を挙げて、頭を深々と下げる。

「ありがとうございました」

そういや、始めのときに礼してなかったなと思います。
爺ちゃんに知られたら怒られるなあ……

礼で始まり、礼で終わるってのが日本の武道における教えである。

「ありがとうございました」

晴れ晴れとした表情のヴィヴィオ。

「色々勉強になりました！」

「こっちなもな。最後のアレ、見事に騙されちゃったよ」

「咄嗟の思い付きでやったんですが、たまたま決まっただけです」

「それ言っちゃ俺の取った2本、全部運で決まったようなもんだけどな」

咄嗟で思いつくなんて恐ろしい真似をしやがるなあ、一歩間違えれば自滅だぞ。

自分の弱点すらも、こういう形で利用するって姿ってのはとても参考になる。

「ガードと回避の後に使ったのって？」

「ああ、“切っ先落とし”のことか。ようは相手の攻撃が最大になる前に叩き落とすってやつだな。攻撃をいなすって言えば分かるか？」

「原理自体は分かりますが……」

「お前の動体視力なら楽に出来そうだけどな」

「でもタイミングとか難しくないですか？」

「相手の腕の動きを凝視してて、ある程度目が慣れてくれば出来ると思うぞ。まあ、もう1つ“音”ってのも大きな助けになったんだけどな」

「音って……もしかして、地面を蹴る音ですか？」

「流石優等生。察しが良いな。まあ、お前が本気でやってたんなら……いなすなんて芸当、無理だったろうけどな」

「わたしは本気でしたよ」

「身体強化に回す魔力量が、ノーヴェさんと組手してたときの半分以上だったのにい？」

意地悪な質問を試してみる。

「や、やっぱり気付いてたんですか？」

「そりゃあ気付くよ。魔力の感知だけなら、お前に負ける気がしねえな」

「それ以外はさっぱりだけどな」と自虐的な呟きを付け加える。

「涼さんは、何か武術の経験あるんですか？」

「祖父からちよつと教わった程度だ。“切っ先落とし”にしても教えによるものだよ」

「お爺さんって強いんですか」

「まあな。魔力皆無の癖に魔力強化した俺を1分もかからずノックダウンするぞ」

あの人は単純な体術オンリーでとてつもない強さを持っている。こちらの力の方が強かろうが、あの人の前には些細な問題でしかない。

不利な状況にあっても、勝機は必ずあると教えてくれたのも爺ちゃんだ。

圧倒的な差があれば、相手はその分油断する。

いくら注意したところで、油断は生まれる。

それに付け込み、逆転の一手を講じる——ってのが爺ちゃんの勝利の理論らしい。

今は腰がヘルニアで大変らしいが、実家に戻る度に手合わせをしてもらっている。

「す、凄い人ですね……」

「ある意味化物だよ、あの人は。だからあんな呼ばれ方してたみたいだし——」

古くからの友人からは、とあるあだ名で呼ばれている。
ま、その件に関してはおいおい話すことになるだろうから、今回はスルーするでしょう。

「思ったより、頑張ったじゃねーか」

ノーヴェさんにわしゃわしゃと頭を撫でられる。

妙に気恥かしくなって、「止めて下さいよ」と言うが止めてくれない。

「あたしも褒めてあげるっスよ」

と、何故かうエンディさんも加勢して、頭をくしゃくしゃにされることとなった。

何かしら柔らかい物体が触れる感触があったような気がしたが、きつと気のせいだろう。

うん、きつとそうに違いない。

《ケダモノです、変態です、不潔です、不純です！それから巨乳は死ねえ！！滅べ、無くなれ！》

後半は私怨だよな？

と言うか、リョウコ……お前なんで胸のサイズ気にしてるんだよ？

《H A H A H A、ナニヲイツテイルンデスカ。フルメンテの際のA I 容器が人型で、それが貧乳のロリッ娘にされたとかそんな事アリ

マセンヨ?」

ああ、そうだったんだ……

巨乳ではなく、虚乳……と言うわけか。

《跳馬印のあの冷血女めえ……》

ちなみに、次回のフルメンテ予定日は再来月という事実をここに付け加えておこう。

第6話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は＋9・49KB

倍近く増加してます

描写は増えてますが、相変わらず主人公は負けます（笑

修正前は相手の攻撃を見切ってた節があったのですが、修正後は控えめに音で判断することに

グレードダウンしている気がしなくもない……

活動報告を書こうかと思ったのですが、前日まで県外に居たので……
TTPで二次創作が危うい立場にあるわけですが。

それでも更新は続けていこうと思います

まあ、心配していても何も解決しませんしねえ

次回更新も少々遅れるやもしれません

感想くださると嬉しいです。

では——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710x/>

魔法少女リリカルなのはViVid Another Story

2011年11月13日00時39分発行